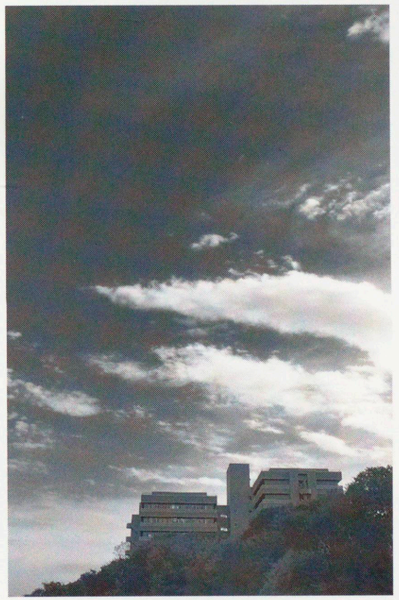
ふじみの

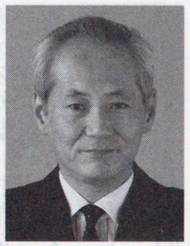
No.50

東京農大畜友会



巻頭言

畜産学科長　半　澤　　惠



畜友会の機関誌「ふじみの」第五十号の発刊に当たり、ご挨拶申し上げます。

卒業生の皆さん、おめでとうございます。ここで得た宝を、明日からの人生に生かして下さい。立場が変わり、周りの見る目が変わったとしても、明日の皆さんは今日の皆さんと繋がっています。安易に答えを求めず、いつも今を大切にして下さい。そしていつも笑顔を忘れずに、自分を追い込みすぎず、甘やかしすぎず、堂々と胸を張って生きてください。皆さんの活躍を祈念しています。そしてたまには帰巣本能を発揮して、厚木キャンパスに訪ねてきてください。いつでも皆さんの帰りを待っています。

在校生の皆さんは、この節目の機会にこれまでの大学生活を振り返り、自分の将来設計を見直し、目指すゴールを再確認した上で、勉学、課外活動、様々なことに思いっ切りチャレンジしてください。特に収穫祭に中心メンバーとして携わっている面々には、着々と成果が挙がりつつある昨今、みんなの力を集約して目標に挑戦してください。

新入生の皆さん。ご入学おめでとうございます。心よりお祝い致します。本誌「ふじみの」には、先生方、学生諸氏による寄稿文に加えて研究室、収穫祭など、畜産学科に関する様々な情報が満載されています。畜友会は、畜産学科の学生を正会員、大学院生や教職員を特別会員とする親睦団体で、新入生歓迎会から、収穫祭・体育祭、卒業生送別会まで、様々な企画で大学生活を楽しく充実したものにしてくれます。皆さんも畜友会の活動にも積極的に参加し、生涯の仲間をつくり、共にたくさんの貴重な体験をしてください。

大学は、受け身になって授業を受けて優秀な成績を治めることが目的ではありません。専門分野に関する知識・技能の修得に努めるのはもちろんのこと、社会人としての目標を見出し、必要な素養を養い、学び方、考え方を確立し、自分で課題を発見し、それを解決する力や、新たな価値を創造する力を身につける場です。そうした積極的な態度こそが、真に充実した楽しいキャンパスライフにつながります。4年後の自分に期待できるような充実した時をすごされることを祈念しています。

結びに、本誌発刊にあたって、快くご寄稿下さった皆さま、並びに編集に携わった畜友会の役員諸氏および関係各位に心より感謝申し上げます。

平成二十六年三月吉日

ふじみの発刊にあたり

畜友会委員長　式　地　優　貴

菜の花の香り漂い、桜の芽も綻ぶ今日この頃、今年も「ふじみの」第５０号を発行することとなりました。

本誌には、畜産学科の先生方および、学生たちの原稿や昨年度の事業報告を記載しています。昨年は、学生は大学の行事、就職活動他にも様々な面で不安を抱えていました。しかし、その不安に負けない学生一人一人の夢、希望が感じられる文章が載せられています。

是非、隅々までご覧いただけたら幸いです。

ふじみの
目次

巻頭言
畜産学科長　半澤　惠　1

ふじみの発刊にあたり
畜友会委員長　式地　優貴　3

同窓会だより
同窓会会長あいさつ　畜産学科同窓会会長　渡邉　誠喜　6

畜産振興会
東京農業大学畜産振興会　便り　畜産振興会会長　半澤　惠　8

研究室だより
家畜繁殖学研究室　10
家畜育種学研究室　13
家畜生理学研究室　15
家畜飼養学研究室　18
畜産物利用学研究室　21
家畜衛生学研究室　23
畜産マネジメント研究室　26

ふじみの寄稿原稿（教員）
農大の一員になって　古川　力　28
すばらしい先輩たち　山本　孝史　29

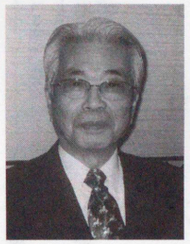
集う学友
兎にも角にも濃い4年間　4年　大隅あかね　31
私の農大ライフ　3年　星野　美晴　32
ボランティア部と幹事とわたし！　2年　中谷あかね　33
農大生としての1年間　1年　小野寺　綾　34

畜友会だより
平成二十五年度畜友会活動報告　35
平成二十四年度畜友会決算報告　36
平成二十四年度収穫祭特別会計収支決算報告　37
平成二十五年畜友会予算　38
平成二十五年収穫祭特別会計予算　39
平成二十五年度畜友会役員　40
第十四回厚木キャンパス収穫祭　41
第一二二回体育祭事業報告及び結果報告　49
東京農業大学農学部畜産学科「畜友会」会則

第十四回厚木キャンパス収穫祭・第一二二回体育祭各部門委員長より
なめたらいかんぜよ。　統一本部委員長　3年　式地　優貴　55
みんなに支えられて　特別企画委員長　3年　池内　元希　56
色がついた2年間　宣伝隊隊長　3年　當間　恵理　57
畜産神輿製作所　神輿隊長　3年　中村　大輔　58
畜友会に入って　体育祭委員長　3年　東原　正弥　59
たくさんのありがとう　櫓装飾委員長　3年　長谷川怜加　60
Shall We ミシン？　装飾委員長　3年　小泉　貴大　61
家畜苑　家畜苑苑長　3年　長谷川周平　62

編集後記
編集委員長　3年　浦野　由麻　63

同窓会だより



同窓会　会長挨拶

畜産学科同窓会・本学名誉教授
会長　渡　邉　誠　喜

東日本の大震災・原発事故被災地の一日も早い復興が待たれるところであり、被災地の皆様には心からお見舞い申し上げます。

近年は国の内外においていろんな問題―領土問題、TPP問題、食糧生産問題、耕作放棄地、学校教育問題等など―が派生しており、国民こぞって解決に当たらなければならないと思われるところであります。

さて、「**卒業生のみなさん**」ご卒業おめでとうございます。皆さんの学部四年間、また、大学院二年間あるいは五年間、この東京農業大学厚木キャンパスにて勉学に勤しまれ、講義に、実験実習に、そしてクラブ活動に精励され、多くの友人を得、人格豊かな畜産技術者として本日、目出度く農学士、畜産学修士、あるいは畜産学博士の学位を取得されました。同窓会を代表して心からお慶び申し上げます。皆さんは卒業と同時に同窓会会員になられました。同窓会へのご入会を大いに歓迎いたします。また、この晴れの日を待ち焦がれておられたご父母の皆様にも祝意を表したいと存じます。

畜産学科は創設六十有余年になります。この間、学部卒業生は九千余名に達し、また多くの大学院修了者をも世に送り出し、彼らは国の内外において畜産学・畜産業界並びに関連産業界の中核となって華々しく活躍しております。

最近、グローバリゼーション謳歌のもと、生存競争のみが激化しておりますが単に排他的になることなく「協調」と「以和為尊」をもって進むよう、望みます。皆さんにとっては厳しい社会情勢ではありますが、東京農業大学畜産学科で培った学術・技術と農大精神をもって事に当たれば皆さんの活躍の場は無限に広がります。ご活躍をご祈念いたします。

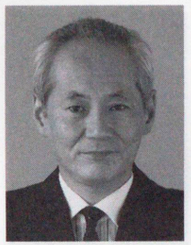
「**新入生の皆さん**」　皆さんは多くの大学の中から伝統ある東京農業大学畜産学科を積極的に選択・見事ご入学が許可され、農大生となられました。ご入学されたことを心からお慶び申し上げ、大いに歓迎いたします。

畜産学科は昭和二十二年四月に専門部畜産科として千葉県茂原市に設置され、昭和二十四年に新制大学令により農学部畜産学科となり、昭和三十四年から三十六年にかけて世田谷キャンパスへ、そして再度平成十年から十二年にかけて厚木キャンパスへ移転しました。大学院は昭和六十一年四月に農学研究科に畜産学専攻修士課程として、平成二年に博士後期課程として増設されました。今や大学農学部の中で畜産学科を名乗る大学は唯一であります。申すまでもなく、農学は生命の根源を科学する学問分野であり、畜産学は食糧生産はもとより生命科学や環境科学をも包含し、さらにはこれらのフロンティア部門をも研究する学問分野であります。

新入生諸君は今後、長い伝統の中で培われて来た農大精神を身に着け、文武両道を旨として勉学とクラブ活動などに精励され、生涯の友となる素晴らしい友人と良き恩師を見つけ楽しい大学キャンパスライフを勝ち取ってもらいたい。そして、創意工夫と自省を念頭に常に思慮・分別を弁え、挑戦することを拒まず、自己PR力を養うことにも心を配って欲しいと思います。そして四年後には農大畜産学科に在籍していた証を示せるよう、証つくりにも心がけてください。ご健闘を祈ります。

卒業生並びに新入生のご活躍を祈り、同窓会会長のご挨拶といたします。

畜産振興会



東京農業大学畜産振興会　便り

東京農業大学畜産振興会
会長　半澤　恵

東京農業大学畜産振興会が発足して、早二十三年が経ち「ふじみの」に便りを執筆する時期となりました。そこで本会の発足の経緯やこれまでに実施した事業について紹介します。

本会は東京農業大学農学部畜産学科及び大学院農学研究科畜産学専攻に所属する学生の教育・研究の向上に資するために、平成三年三月二十三日に学校法人東京農業大学の認可を得て設立されました。会の運営には学内外から本会の役員として理事、監事が選任され、理事会で必要事項が審議決定され、運営にあたっています。一方、役員以外の評議員によって評議員会を組織し、理事会での審議・決定内容について承認を得ることになっています。

具体的な事業内容として、平成二十六年一月現在、奨学生証を毎年二～四年次生、今年度より各学年二名ずつ計六名に改訂、延べ七十三名採用、優秀卒業論文賞を毎年一名、計二十三名に授与、姉妹校短期留学生並びに渡米農業実習生への交通費の一部を過去八名に支給、さらに関連学会誌に学術論文を掲載・発表した学生、または学会で口頭発表した学生、延べ二百五十九名を奨学しています。また、経済的に困窮した学生への奨学金の一時貸与も行っています。

平成九年四月にここ厚木キャンパスが開学し、畜産学科が移転しましたが、本年三月には厚木キャンパス育ちの第十三期の学科学生ならびに第十一期の博士前期課程大学院生、第八期の博士課程後期大学院生が卒業します。移転から二年間は、教員が世田谷キャンパスにおり、厚木キャンパスは学生のみという状態でした。そこで本会では、学生への教材提供の意味から平成九年には乳用子牛雌一頭、同十年にはリャマ雌一頭、雄一頭、そして同十一年には黒毛和種子牛一頭を寄贈しました。これらの家畜はいずれも、厚木キャンパスでお披露目の後、本学富士畜産農場に繋養されました。リャマは毎年収穫祭の折に畜産学科統一本部で実施する家畜苑の時に人気者になっています。黒毛和牛は優秀な二世も誕生するなど、それぞれ実習・実験の材料として活用されています。

また、これら諸事業の成果を取り纏めたものを平成十年より毎年振興会会誌として発行しており、こちらも十六号を数えるまでになりました。

本会設立の契機は平成二年十二月一日、不慮の交通事故により残念にも尊い一命をなくされた江渡宗徳君（当時畜産学科二年在学中）のご両親から寄付を賜った原資を基金として設立されましたが、その後、逐次拡大してきた事業を遂行するため、

一　東京農業大学畜産学科同窓会からの寄付金（設立時）
二　賛助会員会費（受領実績：延べ八百六十七名）
三　一般寄付金（受領実績：延べ七十三名）

などを資産に加え賄われています。より一層の充実した事業展開のためには更なる原資が必要です。

卒業生には本会の趣旨をご理解いただき、後輩学生の育成のため是非ご支援を賜りたくお願いいたします。特に本会から表彰を受けた方々は本会の活動を心に留めおいて下さい。

在学生諸君には本会の目的に叶う事象が生じた場合には本会を有効に活用され、充実した学生生活を送られるよう祈念し、振興会便りとします。

研究室だより

家畜繁殖学研究室

家畜繁殖学研究室は門司恭典教授、桑山岳人教授、岩田尚孝教授のご指導のもと、大学院生六名、四年生三十四人、三年生三十三名で構成され、生徒同士で協力し合いながら日々の研究に取り組んでいます。

当研究室では、家畜（ウシ、ブタ、ニワトリ、ウズラ）を利用して生殖生理のメカニズムを追求し、繁殖効率の改善に取り組んでいます。具体的には、生殖に関わる内分泌機構の解明、動物胚の生産や操作、細胞、精子、人工授精、受精卵移植の繁殖技術の確立を目指しています。

三年生は、生殖学の基礎的な知識、実験方法等を身に付けると共に大学院生や四年生の研究活動を補助しながら興味のある研究分野について理解を深め、研究テーマを決定します。

当研究室では国内や海外で行われる学会にも積極的に参加し、その成果を論文として関連学会に発表しています。

研究室の主な年間行事は、新入室員歓迎会（四月）、論文発表会（年数回）、収穫祭の文化学術展での研究発表、スポーツ大会（年二回）、研修旅行、卒業生送別会等があります。

繁殖学研究室は日々の研究、勉強と楽しい行事を両立しながら充実した研究室生活を送っています。

氏名	卒業論文題目	指導教員
有我　真里	卵胞液の体外成熟支持能力にウシの月齢が及ぼす影響	岩田　桑山
井沢　裕幸	ウシ卵子への顆粒層細胞に由来するミトコンドリアの注入に関する研究	岩田　桑山
伊丹　暢彦	レスベラトロールの添加がブタ初期胞状卵胞卵子の体外発育に及ぼす影響	岩田　門司
小川佳那子	カルボキシル・ポリリジンの添加濃度がブタ凍結精液の性状に及ぼす影響	門司　岩田
木下　尚也	ブタ卵巣の保存が卵子内ミトコンドリアＤＮＡコピー数に及ぼす影響	岩田　門司
黒澤　文香	酪農家における子牛哺育方法に関する研究	岩田　門司
佐々木貴也	ウズラ精原幹細胞のニワトリ精巣への移植と精子形成の確認	桑山　岩田
清水　香織	加齢がウシ卵子のミトコンドリアＤＮＡのミューテーションに及ぼす影響	岩田　桑山

城間　朝輝	肉牛の繁殖障害とその対処法について	岩田　門司
鈴木　聖哉	ニワトリ胚の血管内循環期資始原生殖細胞の分離方法と培養方法の確立	桑山　岩田
高橋　恭平	ウズラとニワトリの雑種に関する研究	桑山　岩田
高橋　大輔	精巣へのブスルファン投与による不妊化の影響の調査	桑山　岩田
高橋　玲子	カルボキシル－ポリリジン添加ブタ凍結精液の体外受精能力	門司　岩田
竹内みちる	ウシ卵胞液成分に加齢が及ぼす影響	岩田　桑山
谷口　真人	酪農経営における乳生産と収益性について	岩田　門司
堂下　大樹	加齢が顆粒層細胞内ミトコンドリアの品質に及ぼす影響	岩田　桑山
中山　太郎	卵中への糖類添加がニワトリ胚の発生速度と性比に及ぼす影響	桑山　岩田
名倉　智広	ニワトリ・ウズラ胚へのＰＧＣ移植の卵殻内胚操作法と卵殻外胚操作法の比較	桑山　岩田
西村　萌	ＣＴＧＦ添加がブタ前胞状卵胞由来卵子の体外発育に及ぼす影響	岩田　門司
羽場久美子	レスベラトロールの体外成熟培地への添加がブタ単為発生胚の胚盤胞期胚の発生に及ぼす影響	岩田　門司
藤木菜都美	体外成熟培地への乳酸の添加がウシ卵子のＳＩＲＴ１量および受精率に及ぼす影響	岩田　桑山
細川貴代美	レスベラトロールが加齢ウシ初期胞状卵胞卵子の体外発育に及ぼす影響	岩田　桑山
堀　智都	培養基質の硬さがブタ初期胞状卵胞由来卵子の体外発育に及ぼす影響	岩田　門司
松井　望	ウシ初期胞状卵胞卵子への顆粒層細胞の追加が体外発育卵子の性状に及ぼす影響	岩田　桑山
松岡　瞳	レスベラトロールの体外成熟培地への添加がウシ卵子の体外受精能力に及ぼす影響	岩田　桑山
松本　美保	培養皿底面の形状がウシ初期胞状卵胞卵子の体外発育に及ぼす影響	岩田　桑山

水野英衣美	当研究室で体外受精に使用するウシ凍結融解精液の選定	門司 岩田
宮崎　智希	凍結時の冷却速度がカルボキシルーポリリジン添加ブタ凍結精液の性状に及ぼす影響	門司 岩田
向田　幸司	ブタ卵巣保存がSIRT1発現に及ぼす影響	岩田 門司
村山　智紀	レスベラトロールの体外成熟培地への添加がブタ卵子の体外受精成績に及ぼす影響	岩田 門司
矢口　沙耶	N－アセチルーL－システインが加齢ウシ初期胞状卵胞由来卵子の体外発育能力及び発生能に及ぼす影響	岩田 桑山
渡辺　良平	培養液の粘性と胚の密度がウシ体外受精の発生率に及ぼす影響	岩田 桑山
鵜澤　美穂	ブタ卵巣の保存が体外成熟前後の卵子内ミトコンドリアDNAコピー数の動態に及ぼす影響	岩田 門司
鈴木由紀子	ブタ卵巣の保存が卵核胞期の卵子内ミトコンドリアDNAコピー数およびATP含量に及ぼす影響	岩田 門司

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、育種学、分子生物学的見地から広範囲にわたる研究活動が実施されています。

当研究室では、古川力教授をはじめ、野村こう准教授、高橋幸水助教の指導の下、大学院生1名、研究生1名、4年生27名、3年生34名によって構成され、室員各自の自覚と相互の協力によりそれぞれの目標に向かって日々研究が続けられています。主な研究テーマとしてとしては家畜（ウシ・スイギュウ・ヒツジ・ブタ・ヤギ）を供試動物として、マイクロサテライトマーカーやミトコンドリアDNA遺伝子情報による連鎖地図作製、系統遺伝学的研究や、統計遺伝学に関する研究などが行われています。

研究室では一年を通して新入室員歓迎会、定期総会、収穫祭への参加、研修旅行、特別講演会、卒業論文発表会などが行われ、室員は実験動物の管理、毎週行われているゼミ、定例室員会、それぞれのテーマに即した研究などを日々行っています。さらに研究活動は学内にとどまらず、先生方や院生により学会発表などが精力的に行われています。

氏名	卒業論文題目	指導教員
阿部　美海	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの連鎖地図作製に関する研究	野村 古川
大友　奈々	スイギュウのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	高橋 古川
小川　裕策	スイギュウのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	高橋 古川
角　佳菜絵	マイクロサテライトDNA多形情報に基づくヤギの系統遺伝学的研究	野村 古川
川多　彩加	スイギュウのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	高橋 古川
鬼島明日美	ヤギの周年繁殖関連遺伝子の多型解析	野村 古川
小寺　稜	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの連鎖地図作製に関する研究	野村 古川
笹岡さくら	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの連鎖地図作製に関する研究	野村 古川
佐々木裕之進	マイクロサテライトDNA多形情報に基づくウシの系統遺伝学的研究	野村 古川

高田　洋行	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの連鎖地図作製に関する研究	野村	古川
永井　健一	非侵襲的試料からのDNA抽出法の開発	高橋	古川
中戸川茉由	ヤギの周年繁殖関連遺伝子の多型解析	野村	古川
永野　太基	スイギュウのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	高橋	古川
原田　諒一	マイクロサテライトDNA多形情報に基づくウシの系統遺伝学的研究	野村	古川
堀江　元樹	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の多型解析	高橋	古川
堀川竜之介	マイクロサテライトDNA多形情報に基づくウシの系統遺伝学的研究	野村	古川
松尾　拓也	マイクロサテライトDNA多形情報に基づくブタの系統遺伝学的研究	野村	古川
松木　光平	スイギュウ血清アルブミン遺伝子の多型解析	高橋	古川
松橋　知代	ミトコンドリアDNA全塩基配列に基づくヤギの系統遺伝学的研究	野村	古川
丸山　雄大	スイギュウのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	高橋	古川
本石　有沙	ヤギの周年繁殖関連遺伝子の多型解析	野村	古川
森井　貴也	ミトコンドリアDNA全塩基配列に基づくヤギの系統遺伝学的研究	野村	古川
山下　広大	スイギュウのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	高橋	古川
吉原　麻代	スイギュウのミトコンドリアDNA全塩基配列の解析	高橋	古川
和田　史織	マイクロサテライトマーカーを用いたヤギの連鎖地図作製に関する研究	野村	古川
渡辺　早紀	マイクロサテライトDNA多形情報に基づくヤギの系統遺伝学的研究	野村	古川
井口　望	非侵襲的試料からのDNA抽出法の開発	高橋	古川

家畜生理学研究室

家畜生理学研究室は半澤惠教授をはじめ、平野貴助教、原ひろみ講師、一昨年定年退職された吉田豊非常勤講師のご指導のもと、大学院生6名、学部四年生35名、学部三年生33名で構成されています。

本研究室では、家畜、家禽に発現する生理的な特徴やその生理機構の遺伝的支配に関する研究を行っています。研究対象の動物によって大きく三つに分けられ、①ニホンウズラに関する研究、②ウマに関する研究、③ウシに関する研究に分けられています。

学年ごとの活動としては、三年次に生理学に関する基礎的な知識、技術を身につけるために講義、ゼミ、実験実習、二泊三日の富士農場実習を行うとともに、日常的な実験動物の飼育管理、院生、学部四年生の卒業論文の補助とともに実験別の知識を得るために課題別実験を行っています。四年次にはこれまでに得た知識、技術をもって各々が興味を持った前述の①から③の研究を引き継ぎ、あるいは新規のテーマを先生との議論により決定し、卒業論文作成を行っています。院生は各々の学位論文のテーマに対して日夜研究し、その結果を学会などで発表しています。

年間の主な行事として、新入生歓迎会、収穫祭文化学術展、収穫祭模擬店、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会、年二回の納会、家畜舎大掃除、週一回のゼミナールなどがあります。

氏名	卒業論文題目	指導教員
安藤　大貴	ニホンウズラK系におけるHSP90AA1対立遺伝子間の熱ショック応答性の差異の明確化	半澤
石井　芽衣	ニホンウズラHSPA2のORFの多型解析	半澤
今井　星良	有機亜鉛を給与した子牛の血中亜鉛、レチノールおよびβカロテン濃度の変動に関する研究	半澤 吉田
岡崎　惇朗	黒毛和種死廃子牛におけるIARS変異の影響 IARS変異によらない死廃子牛の調査	半澤 平野
小倉　大周	ニホンウズラCD8α遺伝子における多型解析	半澤 原
小島　美貴	ニホンウズラDBB1遺伝子座の多型解析	半澤
川口　凌平	ニホンウズラND系における HSP90AA1対立遺伝子間の熱ショック応答性の差異の明確化	半澤
小嶋有美子	競技馬の運動内容及び状態別における血球浸透圧脆弱性と血液性状の年間変動	半澤

小山　敬子　ニホンウズラ DMB2 遺伝子座の多型解析　半澤

佐々木将国　ニホンウズラ BTN2 遺伝子座の多型解析　半澤

佐藤　慎吾　ニホンウズラ CD8α 遺伝子における多型解析　半澤　原

佐藤　佑亮　トリインフルエンザウイルス感染防御に関与するインターフェロン伝達系遺伝子の塩基配列の解析　半澤

柴山　風音　有機亜鉛を給与した子牛の血中脂質量の変動に関する研究　半澤　吉田

清水みらい　ウマ赤血球分化成熟過程における GATA-1,2 遺伝子の mRNA 発現解析　半澤　原

杉野　有　植物性凝集素によるニホンウズラ赤血球凝集原に関する研究　半澤　原

高田　康正　ニホンウズラB系の腸内細菌叢の同定　半澤　原

玉川　敏弘　成熟ニホンウズラの各種臓器における TLR15 の免疫組織染色による局在解析　半澤　原

東郷　七月　ニホンウズラA系における腸内細菌の 16SrDNA 解析　半澤　原

十亀ちひろ　黒毛和種の RBP4 遺伝子多型の探索　半澤　平野

長谷川秀喜　ニホンウズラのND，PおよびY系の TLR15 遺伝子の多型解析　半澤　原

早川　梨紗　ニホンウズラ TLR15 遺伝子(CjTLR15)の 3、UTR 塩基配列の決定　半澤　原

林　千菜美　有機亜鉛を給与した子牛の骨代謝と肝臓機能に関する研究　半澤　吉田

林　未由　競技馬の運動内容及び状態別における赤血球浸透圧脆弱性と血液性状の年間変動　半澤

藤井　航　ニホンウズラ HEP21 遺伝子座における多型解析　半澤

牧野　恭兵　ホルスタイン子牛死廃の原因遺伝子変異およびDNA マーカーの探索：候補 SNP の選定　半澤　平野

三宅　達也　ウマ赤血球の分化成熟過程における GATA-1,2 遺伝子の mRNA 発現の確認　半澤

森嶋　将平　ニホンウズラ MHC 領域における CjDMB1 遺伝子座の多型解析　半澤

安井　舞　ニホンウズラ Mx 遺伝子の臓器別 mRNA 発現量の比較解析　半澤

谷田川眞一　ニホンウズラ系統別の体温、体重、卵重および卵重の関係　半澤

山崎　真美　ニホンウズラ Mx 遺伝子の多型解析　半澤

山田　陽　ニホンウズラ TRIM39.2 遺伝子座の多型解析　半澤

脇　祐沙　音楽が家畜に与える影響　半澤

家畜飼養学研究室

飼料と管理、栄養の3本柱を中心に環境への配慮も含め安全で効率的な畜産物の生産をめざし追求しているのが家畜飼養学研究室です。本研究室では、脂肪をエネルギーとして燃焼するのに必要なカルニチンや抗酸化作用を持つカテキンなどを与えた際に家畜に及ぼす影響を研究しています。他にも、作物茎葉などの未利用資源の飼料化、飼料組成に基づくアンモニアガスの揮散抑制など幅広く研究しています。

各研究は祐森誠司教授、池田周平教授、黒澤亮助教授の指導のもと日々研究を行っており、卒業論文としてはもちろん、成果は学術研究会の場で毎年発表されています。

研究室活動は、室員交流や団結のための歓迎会や納会など様々な行事、家畜生産現場へのインターンシップ、飼料成分分析実験、収穫祭への参加（本年度 模擬店：コロコロ焼き、文化学術展：緑の草が白い牛乳へ～ウシの4つのしくみ～）などがあり、研究室生活は充実し室員は楽しく過ごしています。先生方は実験や実習の場でも、事業においても時に厳しくご指導を頂けるので、勉学や飼養管理技術のみならず社会人としてのあり方まで学ぶことができます。

氏名	卒業論文題目	指導教員
井上　麻紀	運動を付加したラットへのL-カルニチン給与が体脂肪の利用に及ぼす影響	祐森　池田
太田　裕司	ニガウリ茎葉粉末給与がラットの血中脂肪量及び酸化度に与える影響	祐森　池田
大塚　光貴	甘藷茎葉サイレージ給与が暑熱環境で飼育した肥育豚の酸化・抗酸化に及ぼす影響	池田　祐森
加瀬田英美	肥育前期からの茶カテキン類添加飼料の給与がMDB豚の成長と消化に及ぼす影響	池田　野口
嘉手苅あづさ	茶カテキン類添加飼料の給与が肥育豚の排せつ物臭気および腸内細菌叢に及ぼす影響	池田　野口
金井　由貴	甘藷茎葉サイレージ給与が暑熱環境下で飼育した肥育豚の肉質に及ぼす影響	池田　祐森
金本　真実	ウズラ初生雛へのブドウ粕・レスベラトロール給与が抗酸化能と初期発育に及ぼす影響	黒澤

小島昇太郎	飼料中の油脂の飽和、不飽和脂肪酸比率の違いが産卵に及ぼす影響	黒澤
小平　万莉	給与リン酸カルシウムのタイプが産卵鶏の卵質および骨強度に及ぼす影響	祐森　池田
島廻　和馬	シロアリ由来消化酵素投与が鶏の繊維消化率に及ぼす影響	黒澤
水主　裕太	乳牛に異なる量のバイパスリジンを給与した際のL-カルニチンの出納について	祐森　池田
鈴木　寛彩	産卵系の飼料給与後の血中L-カルニチン量の変化	祐森　池田
瀬高　絢	飼料中の窒素形態の差異が日本白色種成兎の血中L-カルニチン量に及ぼす影響	祐森　池田
千葉　樹	乳牛に異なる量のバイパスリジンを給与した際の泌乳量と乳成分に及ぼす影響	祐森　池田
成田　紹人	飼料中の窒素形態の差異が日本白色種成兎の育毛に及ぼす影響	祐森　池田
西川　雄児	シロアリ由来消化酵素による高分子多糖類分解能の評価	黒澤
根岸　裕	給与リン酸カルシウムのタイプが産卵鶏の免疫に及ぼす影響	祐森　池田
橋本　百恵	原産国が異なる飼料原料の違いがウサギの嗜好性に及ぼす影響	祐森　池田
久田　拓郎	乳牛に異なる量のバイパスリジンを給与した際の血中L-カルニチンとリジンの濃度の比較	祐森　池田
福山　尚人	肉用子牛の成長に伴う血中L-カルニチン濃度の変化	祐森　池田
正木理々子	てんかんを持つ犬の行動調査	祐森　池田
増本　景子	茶カテキン類添加飼量の給与が肥育豚の血液性状に及ぼす影響	池田　野口
松澤　智之	甘藷茎葉サイレージ給与が暑熱環境下で飼育した肥育豚の成長と消化に及ぼす影響	池田　祐森
三宅　敦雄	鶏用精液希釈液へのL-カルニチン添加が受精率等に及ぼす影響	祐森　池田
宮田　雄基	甘藷茎葉サイレージ給与が排せつ物の臭気及び腸内細菌叢に及ぼす影響	池田　祐森
向田さつき	肥育前期からの茶カテキン類添加飼料の給与が肉の保存性に及ぼす影響	池田　野口

森本　和也	茶カテキンの給与がラットの盲腸内発酵に及ぼす影響	祐森　池田
藪崎　絢	豚舎における衛生害虫忌避剤の実証試験	池田　祐森
渡辺　謙	厩舎内敷きワラの水洗処理が付着微生物叢に及ぼす影響	祐森　野口
長曽我部信	日本の肉用繁殖牛における飼養形態の比較	池田　祐森
大胡田剛史	納豆粉末添加牧草サイレージの牛における嗜好性	祐森

畜産物利用学研究室

本研究室は、室長の鈴木敏郎教授、多田耕太郎教授、中村優助教、清水香那助手のご指導のもと、大学院生4名、4年次生35名、3年次生35名、総勢74名で構成されており、先進的な加工・分析技術を用い、新しい畜産食品の研究開発に取り組んでいます。

具体的には、乳・肉・卵中に含まれる各種成分の化学・物理的特質ならびに栄養・生理的機能特性を品種、個体、分子レベルで研究しています。また、先進的な食品加工技術（超高圧処理）を用いた新しい畜産食品の研究開発、未利用状態にある畜産副産物（内臓、骨、皮等）を食料資源として活用する研究を行っています。研究成果は、食品成分の機能性や保存性の向上、製品加工工程の改善及び新しい加工食品の開発に利用されています。

研究活動では、3年次に実施する食品の分析や生菌検査等から実験手順や操作方法を学び、4年次の卒業論文実験に活かして、より正確性の高い研究を重ねていきます。年間を通しては、新入生歓迎会、総会、納会、収穫祭に向けたハム・ベーコンの製造実習、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会等を行い、教員と室員の絆を深めつつ、研究室の更なる発展を目指して活動しています。

氏名	卒業論文題目	指導教員
新藤　葵	酸液処理が鶏ガラエキスの抽出性に与える影響に関する研究	鈴木　多田
鈴木　仁之	超高圧処理が卵黄・卵白のゲル形成に与える影響に関する研究	鈴木
伊藤　圭亮		
笠川椰真人		
青木　翔	チーズに含有される高抗酸化性ポリフェノールに関する研究	鈴木　中村
小島　藍		
中村　崇宏	超高圧処理が乳タンパク質のゲル形成に与える影響に関する研究	鈴木
藤原　瑛子		
佐々木　彩	エミュー卵の加工特性に関与するタンパク質の構造に関する研究	鈴木　中村
渡邉　平		
垣見　悠	超高圧処理後の肉色変化に関する研究	鈴木
下田　隆正		
永田　貴之	GABA生成乳酸菌を用いた発酵バターの製造に関する研究	鈴木　多田
平川真理奈		
猪又英美子	豚皮を用いた発酵食品の製造に関する研究	鈴木　多田
後藤　奈穂		
清瀧　健太	GABA生成乳酸菌を用いたヨーグルトの製造に関する研究	鈴木　多田
服部美乃里		

岩井　真介	糸状菌を用いた発酵肉の製造に関する研究	鈴木　多田
服部　遥		
京谷　直美	超高圧処理後に形成されるタンパク質ゲル構造に関する研究	鈴木
山根　有夏		
加藤　舞子	高抗酸化性ポリフェノールを含有するチーズ製造に関する研究	鈴木　中村
加藤　雄大		
神宮　麻帆	GABA生成乳酸菌を用いた発酵食肉製品の製造に関する研究	鈴木　多田
渡邉　瑞菜		
後藤　宏季	エミュー卵の加工特性に影響する含有成分に関する研究	鈴木　中村
渡邊　雄斗		
吉田　彩乃	雪中貯蔵による和牛のウエットエイジングに関する研究	鈴木　多田
依田　和憲		
唐木健太朗	雪中貯蔵による交雑牛のウエットエイジングに関する研究	鈴木　多田
嶋村　由紀		
鈴木　岳	超高圧処理と水晒しを併用した豚心臓ソーセージの製造に関する研究	鈴木　多田
奈良　勇輝		
吉田　太一	畜肉製品中に含まれる機能性成分に関する研究	鈴木　多田

家畜衛生学研究室

家畜衛生学研究室は、室長の村上覚史教授、村田亮助教、また大学院の山本孝史教授のご指導の下、研究生二人、四年生三十二人、三年生三十五名で構成されています。本研究室では、各自で希望する家畜別に牛班、豚班、鶏班、実験動物班の四班に分かれ、動物たちの健康を維持するとともに飼育管理を通して各動物たちへの接し方、育て方を日々学んでいます。

調査研究としては、「農場から食卓まで」に関わる家畜衛生及び食品衛生を対象に腸管内細菌の生体内移行による臓器汚染、農場における牛白血病や乳房炎の調査、人獣共通感染症として重要な豚のレンサ球菌やブドウ球菌、カビの毒素、細菌の薬剤耐性、新菌種の登録や病原性などを研究生、学部生と共に進めています。

主な行事として、月二回の定例会、新入生歓迎会、収穫祭、研修旅行、年末には餅つき、慰霊祭があります。これらの行事を通して各員は団結を深め、個々が目的を持って有意義な研究室活動を行っています。

なお、平成二十五年度の卒業論文の題目は次の通りです。

氏名	卒業論文題目	指導教員
麻生　愛花	エスカリウの散布が牛床の細菌数に及ぼす影響	山本
五十嵐　匠	*Campylobacter jejuni* 盲腸内定着ブロイラーにおける大腸菌群の生体内移行について	村上
池上　達也	抗生物質投与鶏において生体内移行した大腸菌の薬剤耐性	村上
上田沙代子	CE剤投与ブロイラーにおける *Campylobacter jejuni* の盲腸内定着および大腸菌群の生体内移行	村上
内山　涼介	野鼠における家畜の伝染病起因菌保有調査	村田
宇畑　泰子	バルクタンクの各部位における生乳中細菌数の比較	村田
宇山　哲明	仔牛由来大腸菌における血清型とキノロン剤耐性の関連性	村田
大瀧茉里亜	豚および馬扁桃パラフィンブロックからのゲノムDNAを用いたActinomyces属菌の同定	村上

木浦　夏稀　市販フランス産チーズにおけるヨーネ菌DNAの抽出　村上

菊地原勇気　エスカリウの散布が前搾り乳中の細菌数に及ぼす影響について　山本

熊田　翔平　群馬県一部農場における牛白血病浸潤調査　村田

小林　由依　同一農場から分離された*Streptococcus suis*の遺伝子タイピング　村田

佐藤　早貴　病豚および健康豚由来*Streptococcus dysgalactiae*の性状解析　村田

芝山　涼　イヌの口腔内細菌数にLEBAⅢが与える影響　村田

島方　研人　*Actinobacillus pleuropneumoniae*血清型1，9，11および3，6，8型間の交差反応について　山本

下田　星美　子牛由来キノロン剤耐性大腸菌の他剤におけるMIC値の調査　村田

白根　翔　イヌ由来コアグラーゼ陽性ブドウ球菌の菌種同定　村田

関　美咲　*C. jejuni*盲腸定着ブロイラーにおけるCE剤投与と断餌について　村上

関根　勇作　犬におけるアレルギー性皮膚炎と保有細菌・真菌の関連性　村田

高橋　正義　相対湿度の違いにおけるカビの活性・不活性　村上　高鳥

長岡　晋平　豚編等常在菌*Actinomyces* sp.と馬扁桃常在菌*Actinomyces denticolens*の関連性　村上

中島由加里　Campylobacter感染豚における腸内細菌科細菌の生体内移行　村上

中西　啓介　テトラサイクリン系抗生物質投与ブロイラーにおける大腸菌群の生体内移行　村上

新山　洋　富士農場の乳牛における乳房炎の原因菌調査　村田

日橋　翔悟　イヌの口腔内におけるパスツレラ属細菌の保有状況調査　村田

糠澤　努　肥育豚におけるCampylobacterの生体内移行　村上

野口　智史　*in vitro*におけるイヌ口腔内由来細菌に対するLEBAⅢの作用　村田

野田　彩加　病豚および健康豚由来*Streptococcus suis*における毒性関連遺伝子保有調査　村田

橋本　広子　鶏飼料中のカビ分布について　村上　高鳥

羽二生拓也　アミノグリコシド系抗生物質投与ブロイラーにおける大腸菌群の生体内移行　村田

福井　洋介　ホロホロ鳥の鶏用ニューカッスル病ワクチンによる抗体応答と持続性　村田

門馬　脩斗　盲腸粘膜におけるCampylobacterおよびEnterobacteriaceaeの存在について　村上

畜産マネジメント研究室

畜産マネジメント研究室では谷口信和教授と信岡誠治准教授の指導のもと、平成二十五年度は四年生二十二名、三年生二十四名、計四十六名の態勢で研究室活動を行っています。主に畜産経営・経済や流通問題を軸として、流通・販売・消費などの諸過程と関連付けながら課題解決に向けて実習やゼミに取り組んでいます。また、畜産農家の後継者が多いことから、後継者の養成にも努めています。

研究室の研修旅行は、九月下旬に福島県西白河郡西郷村の「独立行政法人・家畜改良センター」を訪ねてクローン牛の作出など我が国の畜産技術の最先端の動向を学ぶとともに、茨城県常陸大宮市の「有限会社・瑞穂農場」の視察・研修を行いました。とくに、瑞穂農場では一千八百頭の大規模酪農と四千二百頭の肉牛肥育を行い素牛の自家生産を行うとともに食品粕などエコフィードの利用と合わせて自らも大面積（委託と併せると三百四十ヘクタール）で自給飼料として稲発酵粗飼料、飼料用米、牧草の生産を行い飼料費のコスト削減に努めており、これからの畜産経営のあり方を学びました。

卒論研究では研究室活動の一環として、東京農大伊勢原農場棚沢圃場において二十アールの水田で飼料用米の栽培を行い、また、東京農大の東日本支援プロジェクト研究に参画し福島県南相馬市で水田十アールを借りて現地で飼料用米のセシウム吸収抑制試験を行っています。また、収穫した籾米はブロイラー、採卵鶏、肉用牛などへ給与し畜産物などへの影響を詳しく調査しています。

平成二十五年度の卒業論文題目は次のとおりです。

氏名	卒業論文題目	指導教員
青木　魁人	低レベル放射性Cs含有の飼料用米の給与試験―ゼオライト給与による畜産物のCs濃度低減―	信岡　谷口
秋森　美沙	超微粉砕米粉の健康食材としての可能性とその効果―籾米を中心として―	信岡　谷口
粟野　隆彦	養豚経営における規模拡大と糞尿処理問題への対応―特に家畜排せつ物法施行後に注目して―	谷口　信岡
宇井真理枝	飼料用米給与における茜鶏の増体および肉質の変化	信岡　谷口
大隅あかね	飼料用米におけるセシウム吸収抑制法の開発―生育ステージ毎のセシウム吸収量について―	信岡　谷口
大村　捷	葉山牛のブランド力とは何か―徹底した飼養管理と販売管理―	谷口　信岡
川添　友誠	競馬の未来―地方競馬の存続価値について―	谷口　信岡
川羽田杏子	超微粉砕米粉の健康食材としての可能性とその効果―玄米、白米を中心として―	信岡　谷口

坂本　佑介	酪農経営における稲ワラの給餌方式と経済性―栃木県下における酪農家の稲ワラ多給餌方式を中心として―	谷口　信岡
佐々木鋼一	地域・時代別の家畜についての考え方―アジア・ヨーロッパを中心に―	信岡　谷口
薗　崇之	飼料用米におけるセシウム吸収抑制法の開発―ゼオライトとカリ肥料によるセシウム吸収抑制―	信岡　谷口
田浦　夏希	飼料用米給与における茜鶏の増体および肉質の変化	信岡　谷口
高崎　淳史	和牛一貫経営における飼料自給化を通じた高付加価値化への挑戦―鹿児島県北さつま牛グループにおける取り組み―	谷口　信岡
高橋　貴洋	低レベル放射性Cs含有の飼料用米の給与試験―鶏肉へのCsの移行程度について―	信岡　谷口
富田さつき	モミ米給与が「はりま」の発育と肉質に与える影響	信岡　谷口
中村　周平	加工乳製品需要へのシフトを通じた生乳需要構造の変化と現状―とくに若者の牛乳離れに注目して―	谷口　信岡
西　美帆	モミ米給与が「はりま」の行動と鶏糞に与える影響	信岡　谷口
西谷　耕平	低レベル放射性Cs含有の飼料用米の給与試験―鶏糞中のCs濃度について―	信岡　谷口
温谷　諒	肉用牛中小規模経営における口蹄疫後の経営対応の差異―再開と中止を分けたもの―	谷口　信岡
野迫　昌平	飼料用米におけるセシウム吸収抑制法の開発―セシウム吸収量の品種間差異について―	信岡　谷口
山田　隼矢	低レベル放射性Cs含有の飼料用米の給与試験―鶏卵へのCsの移行程度について―	信岡　谷口
大島　悠	飼料用米におけるセシウム吸収抑制法の開発―稲ワラのセシウム濃度について―	信岡　谷口

ふじみの寄稿原稿（教員）

農大の一員になって

家畜育種学研究室
古川　力

新入生の皆様、同窓会の皆様、初めまして。平成25年4月より家畜育種学研究室でお世話になっております。ここでは、これまでの経歴を述べてご挨拶とさせていただきます。

私は瀬戸内海を望む愛媛県の小さなミカン農家に生まれました。子供の頃は冬場になるとミカンをたくさん食べて手が黄色くなっていました。最近では、冬場だけでなく年中柑橘が食べられるため、カロリーの半分（?）はミカンから摂取しており、手だけでなく体中が黄色くなっています。健康診断の問診ではいつも黄疸を疑われる始末です。

大学は、瀬戸内海の対岸、広島県福山市にあった広島大学水畜産学部（現在は、東広島市に移転し、生物生産学部）畜産学科の家畜育種学研究室に学びました。それ以来、約40年間、家畜育種学に従事していることになります。

最初の職場は千葉市にあった農林省畜産試験場育種部ですが、つくば研究学園都市の設立にともない筑波へ移転し、合計8年間を過ごしました。所属は統計遺伝学を扱う研究室で、統計の基礎やコンピュータプログラムを学びました。コンピュータは霞ヶ関の農林省1階に鎮座する大型計算機ですが、メインメモリーは150KBなので、いかにメモリーを節約してプログラムを書くかに苦労したものです。

家畜育種は作物育種と違って、国研では育種理論を研究し、実際の育種業務は家畜改良センターや県畜試が行っています。ところが、育種理論を研究するにあたっても、実際の育種業務を知らなければ机上の空論を構築することになってしまいます。そこで、岩手県に3年間出向して豚の系統造成事業に従事し、大ヨークシャー種系統豚イワテハヤチネWの造成に関わりました。最後の年に県の獣医畜産業績発表会において県知事賞をいただいたのが良い思い出となっています。

その後畜試育種部に戻り、学位論文を仕上げてから、農業生物資源研究所に転勤して、3年間、動物遺伝資源と関わりました。この間、ベトナムでの遺伝資源探索、ロシアとの共同研究、カナダでの学会発表、つくばで国際会議主催、外国人研究者の招聘など海外との関係を深めることができました。

また畜試育種部に戻ってから研究室長として5年半過ごしたのが、一ヶ所の研究生活としては最も長いものでした。国研の独立行政法人化にともない、研究管理部門に移ってからは研究活動から離れてしまいましたが、研究企画や人事管理を通していろいろな立場の多様な人々と接することができました。特に、九州沖縄農業研究センターでは暑熱環境下における家畜生産、北海道農業研究センターでは酪農という、それぞれ地域に根ざした分野の研究管理を担当し、幅広く畜産を見ることができました。

あこがれであった農大においては、これまでの経験を活かして、地に足のついたメッセージを伝えていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

すばらしい先輩たち

家畜衛生学研究室
山本　孝史

このたび、お世話になった東京農大を卒業することになりました。「ふじみの」の慣例として何か一文をと依頼されて何を書こうかといろいろ考えましたが、君たちの先輩にはすばらしい人がたくさんいるのに、君たちはあまりそのことを知らない、と感じて来たことに気づきました。そういう方々は君たちの誇りであり、また励みになるはずです。そこで、私がこれまで出会ったすばらしい先輩たちの中から、特に印象に残っている人を紹介したいと思います。

一人目、H氏と初めて出会ったのは1982年メキシコでした。私は「世界養豚獣医学会」参加のためメキシコに行っておりました。ちょうどそのころ国際協力事業団（現国際協力機構：JICA）のプロジェクト（豚コレラワクチンをメキシコで製造できるように技術指導するプロジェクト）がメキシコシティの郊外にある研究所で実施されていましたので、そのプロジェクト・サイトを訪問しました。そこで調整員（現地側と日本側の意思疎通をはかる中心となる人）兼実験動物専門家として働いていたのがH氏でした。彼は当時30代半ば、スペイン語を自由に駆使してきぱきと仕事をこなすのを見てできる人だなあと感じたことを憶えています。それから21年後、JICA本部で彼と実に久しぶりに再会しました。メキシコで実施される新しいプロジェクトで働くことになった私に会いに来てくれたのですが、その時彼は一冊の本を差し出しました。それは「和西・西和対訳　実用・畜産用語集」で、彼が一人で作り上げたものでした。しかもすでに第4版（現在は第5版）となっていました。彼は多忙な本来業務の合間を縫って日本初の「西和・和西畜産辞典」を作り上げしかも改訂を重ねてきたのです。

二人目、M氏と出会ったのは10年近く前やはりメキシコでした。彼は農水省からメキシコの日本大使館に派遣されて来た書記官でした。当時私は、メキシコ随一の畜産州であるハリスコ州の家畜衛生の診断技術を向上させるプロジェクトで働いていました。彼は着任して間もない頃、ハリスコ州の畜産を見たいと言ってきました。われわれは「今度の書記官は着任早々張り切っているね」と噂しておりましたが、彼の話を聞いて耳を疑いました。旅費がないから夜行バスに乗って自費で来るというのです。大使館というところは高価なワインを買うお金はあっても視察する旅費すら出してくれないのかと驚きましたが、自費だというので宿は私が借りていた家に泊まってもらうことにしました。当時、「夜行長距離バスは危険だから利用しないように」と大使館が毎年開く安全講習会で言われており、われわれもメキシコシティへの出張は飛行機を利用していたので半信半疑でした。しかし実際彼は夜行バスでやって来たのです。そして数日間、決して上手ではないスペイン語を使いながらハリスコ州の畜産を精力的に見て回りました。

二人に共通しているのは、自分に課せられた業務を越えて仕事をしていることです。自分の本来業務をこなすだけでも大変なのに、さらに何かをやるというのは強い意欲が

なければできることではありません。君たちにはこのような先輩たちがいるということを励みとしてこれからの人生をガンバッテいただきたいと思います。間違っても電車の中で漫画やスマホに熱中するような人間にはならないでください。陰ながら応援しています。

集う学友

兎にも角にも濃い4年間

畜産学科
4年　大　隅　　あかね

私の農大での生活は、まさにあっという間だった。入学したての頃、学校までの2時間強の道のりが辛くてたまらなかった。しかしそんなふうに思うのも束の間、全力で騒げる友人達、部活動の仲間達のお陰で、いつしかそんな辛さは感じなくなっていた。その上ごく普通の高校に通っていた私にとって、農大での学びは常に刺激となった。特に富士農場での実習は生命を直接肌で感じることができた上に、交流の輪が広がる機会にもなった。

授業だけに限らず、部活動では中学の頃から続けてきた吹奏楽を大学でも偶然続けることになった。そして4年間を通して数えきれないほどの演奏する場を頂けた。様々な仕事も携わらせてもらった。まさか大学生になってもこんなに全力で物事に取り組めるとは思ってもみなかった。入学式の時に偶然出会い、私を部活見学に引っ張っていった子に出会わなければ、私の学生生活はまた違ったものになっていた。そう考えるととても不思議な気持ちになる。

3年生になり、私は畜産マネジメント研究室に配属された。研究室希望の段階では、正直それほど興味のある分野ではなく、知り合いもほとんどいないことが分かり憂鬱になった時期もあった。しかし実際にその中に入ってみると、様々な経験ができたし、室員も同期はもちろん、先生や先輩方も個性豊かな人ばかりで、毎日がより充実するようになった。収穫祭では研究室の文化学術展チームとして参加し、皆と終夜で作業をし、当日も部活動と両立しつつ思い切り楽しむことができた。その後就職活動が始まったが、収穫祭効果もあったのか、私にとって研究室のメンバーは、情報交換をしたり、励まし合ったりとただの同じ研究室員ではなく友人としてかけがえのない存在となった。

この4年間で他にも学芸員の授業をとって様々な博物館の見学、動物園での実習等も行った。卒業論文の関係で東日本大震災の被害に見舞われた福島県に足を運び、被災地の現状を自分の目に焼き付けてくることもできた。挙げはじめたらきりがないほどの経験をさせてもらえた環境や人に対し、とにかく感謝の一言に尽きる。

これから社会人として生きていく中で、農大での4年間は自分にとって糧となるに違いない。そして、学んだことをこれからの人生にしっかりと生かしていきたい。後輩たちには、せっかくの環境の中にいることが出来ているので、後悔のないよう思う存分大学生活を楽しんでほしい。最後に、この場を借りて私に関わってくれた全ての人に感謝申し上げます。

私の農大ライフ

畜産学科
3年　星　野　美　晴

「農大に入ってよかったなぁ…。」

農大に入学してから約二年が過ぎようとしている。この二年間、沢山の仲間と出会い新しい環境に触れ、沢山の経験をすることができた。そんな中で自分自身をいい意味で変えることができたと思う。私の考え方や視野の広さを変えてくれたのが「仲間」、「家族」、「勉強」である。

第一に、「仲間」はサークルや大学の友達だ。全国から農大に集まり、仲良くなり友達になることは学生の特権だと思う。色々な都道府県出身の友達ができ、様々な考えや物事の見方を知ることができた。また、サークルでは、バレーボールサークルに所属し、改めてバレーをすることの楽しさを知ることができた。なぜなら、力の強さや技術、バレーに対する気持ちなど見習うべきことが沢山あったからだ。また、バレーを今までやってこなかった仲間も交えて楽しくバレーをすることや色々な活動ができてとても刺激になっている。

第二に、「家族」は初めての一人暮らしをして改めて大切さや有難さに気付くことができたからだ。一人暮らしがこんなにも寂しいことを知った。一人で家事をこなさなければならないこと、普段の母親の大変さを知った。一人暮らしをして「おかえり」「ただいま」と、実家に帰った時初めて親と会話する言葉の大切さを知った。実家のこたつの暖かさやご飯のおいしさ、家族の変化など毎日何気なく行動していた事、見ていた事、食べていた事、が当たり前ではないということだ。しかし、実家を出たことにより、その変化に敏感に気付けるようになった。これからは親孝行、家族孝行をしていきたいと思う。

第三に、「勉強」は大学の勉強で多くの知識を吸収することができたからだ。私は農業高校出身で、高校生の頃先生に「農業のことでわかることは、農業高校出身の貴方が教えてあげなさい。普通教科のことは友達ができたとき、普通高校出身の友達に教えてもらいなさい。そして、お互いがお互い学びあうことが大切です。」と教えてもらった。大学に入学し勉強をしていく中で当時の先生が言ってくれたことが分かった。お互いに勉強を教えあうことで自分もより理解ができるようになったからだ。また、農業や畜産についてのより専門知識を学んでいく中で、学びたい、知りたいと思う視野も広がり、さらに研究室にも入り将来に活かしたいと思うことが増えていった。机に向かって勉強するだけではなく、学んだことを実際に活かせるようにしていきたい。

私は来年の春で四年生になる。大学生活は本当にあっという間にすぎていく。残りの一年一生懸命学び、遊び、そしてまた卒業をするとき、

「農大にはいって本当によかったなぁ…。」と思えるように私の農大ライフを一日一日大切に過ごしていきたい。

ボランティア部と幹事とわたし！

畜産学科
2年　中　谷　あかね

今までの大学生活を振り返ってみると、大半がボランティア部の思い出だ。

まずは1年生。入学してすぐの部活動紹介で小笠原の海に魅了されて、たったそれだけの理由で入部した。そして実際に小笠原に行った。もちろん海はきれいで、ゴーグルをつけて潜っただけで、水族館に展示されているようなカラフルな魚がいっぱい泳いでいた。夜は星がきれいで、流れ星もたくさん見れた。活動内容は外来植物の駆除や観光地へと続く橋の架け直し作業で、観光客は入れない無人島へ行ったり、非日常の作業でとても楽しく、喜んで作業していた。また、林野庁の方々の指導の下の作業なので、裏話がたくさん聞けた。充実した4日間はあっという間にすぎ、帰りの船の中では、「また小笠原に絶対行くー!!」といっていた。完璧に小笠原の虜になった！

そして、冬には幹事になった。あんまり活動に参加していなかったし、同級生の顔と名前も一致していなかったのでとても不安だった。ここから毎日いつもボラ部のことを考えてた気がする…。

2年生になってから本格的に幹事として仕事をし始めた。一番苦労したのは、部員の多さ。まとめるのも大変だし、顔と名前を覚えるのに頭がぐちゃぐちゃになり、一苦労。

幹事になっていいこともたくさんあった。いろんな人と出会い、仲良くなれた。先輩、同級生、後輩、ボランティア先の人。自分の視野が広がり、新しいことに関心を持つようになった。コミュニケーション力がついたし、人間としてちょっとは成長できた気がする。

ボラ部は「幹事の言うことは、絶対！」という鉄の掟がある。だから私はそれを利用して、いろんな無理を言ってきた。だけどみんなが支えて頑張ってくれたので、最後までやり遂げられた。ありがとうございました!!

バタバタしていて、なにをしてても部活のことを考えてた。嫌だな、って思う時もあったけど最終的にはやっぱりボラ部が好き！って思う。忙しかった幹事も、もう終わり。

ボランティアと聞くと、堅いイメージがあるけど、ボラ部は誰も「今、ボランティアしている」なんて思って活動していない。それぞれ自分自身が楽しんでいて、ニコニコしながら活動している、とっても素晴らしい部活です！そんな部活の幹事ができてよかった！

農大生としての1年間

畜産学科
1年　小野寺　綾

新しい環境への期待と不安を胸に農大に入学してから、早いもので1年が経とうとしています。食品関係の仕事へ就くという夢を抱きつつも、畜産についての知識など何もない状態から始まった私の大学生活でした。しかし専門的な内容を学ぶことのできる日々の講義や夏季休業中に行われる3泊4日の畜産実習、後期に行われる化学実験や生物学実験を通し、今では畜産についてもっと学びたい、という強い気持ちを持つようになりました。

夏季休業前に行われるはじめての試験では効率よく勉強をすることができず苦労しましたが、友人たちと勉強会を行い励ましあい、乗り越えることができました。自分で勉強することの難しさと、友人と励ましあえるということの心強さを知った試験期間でした。

畜産実習では人生で初めて牛、豚、鶏とふれ合いました。飼育舎の清掃をはじめ搾乳、給餌など、実際の作業は想像していたよりもはるかに大変で、家畜の日々の管理の難しさを実感しました。同じ班の仲間たちと協力して過ごした4日間は、今でも強く心に残っています。

部活動は、ウインドオーケストラ部（ホワイトウインドオーケストラ、通称WWO）に所属しています。楽器経験はほぼありませんでしたが、4月の新歓ガイダンスでの演奏に強く心を惹かれ、入部を決めました。

WWOは、音楽に真摯に向き合い楽しみ、またその楽しさを伝えることを大切にしている部活です。学内サマーコンサートをはじめ、厚木市のさまざまなお祭りでの演奏、収穫祭ステージ企画での演奏など、たくさんの本番を経験してきました。聴いてくださった方々の笑顔、あたたかな拍手、「アンコール！」の声、演奏会アンケートでの励ましの言葉。すべてが本当にうれしくて、どの演奏会の思い出も、私にとって本当に大切な宝物です。

収穫祭ではWWOはポトフを販売しました。はじめて経験する収穫祭の活気に圧倒されながらも、調理や販売をすることはとても楽しい経験でした。収穫祭ステージ企画の演奏も含めて、とても思い出に残った2日間でした。

2年生になると勉強もより専門的になり、今まで以上に難しくなると思います。部活においても後輩ができ、責任を背負うことが多くなります。それでもこの1年で経験したことは確かな土台となってくれると信じています。

勉学を第一に、友人や先輩たちと過ごせる時間を大切に、また、WWOの一員として奏でる大好きな音楽とともに、2年生の1年間もたくさんの経験を重ねてゆきたいと思います。

畜友会だより

平成25年度畜友会活動報告

平成25年6月1日～平成26年3月31日

平成25年

6月24日	平成25年度畜友会定期総会 平成25年度畜友会・畜産学科収穫祭実行委員会（統一本部）の立ち上げ （於　第一講義棟1102教室）
7月2日	新入生親睦会（於　レストランけやき）
10月3日	第14回厚木キャンパス収穫祭　及び 第122回体育祭厚木団結式　出席 （於　レストランけやき）
10月10日	第14回厚木キャンパス収穫祭　及び 第122回体育祭畜産学科統一本部本部開き （於　レストランけやき）
10月12日	厚木パレード　参加（於　厚木一番街）
11月1日	第14回厚木キャンパス収穫祭　前夜祭　参加
11月2日～3日	第14回厚木キャンパス収穫祭　参加 （家畜苑、研究棟アート、神輿展示、特別企画、宣伝隊）
11月4日	第122回体育祭　参加（於　世田谷キャンパス）
11月25日	第14回厚木キャンパス収穫祭　及び 第122回体育祭畜産学科統一本部本部閉め （於　レストランけやき）
11月29日	第14回厚木キャンパス収穫祭　及び 第122回体育祭厚木慰労会　出席 （於　レストランけやき）

平成26年度

3月12日	畜友会誌「ふじみの」50号発行
3月21日	平成25年度　卒業祝賀会・卒業記念品贈呈（於　厚木キャンパス）

平成 24 年度 畜友会 収支決算報告

収支決算書　平成 24 年 6 月 1 日～平成 25 年度 5 月 31 日

Ⅰ. 一般会計

収入の部　　(単価：円)

科目		決算額	予算額	差異	備考
会費	新入生（H24年）	1,142,500	2,160,000	1,017,500	新入生：10,000 × 114 名、2,500 × 1
	編入生（H24年）	15,000	15,000	0	編入生：5,000 × 3
	過年度分	440,000	1,770,000	1,330,000	在学生：10,000 × 44 名
普通預金利息		328	0	△ 328	
前年度一般会計繰越金		2,893,132	2,893,132	0	
H23 年度収穫祭特別会計からの繰入金		97,341	0	△ 97,341	収穫祭特別会計収支差額
合計（A）		4,588,301	6,838,132	2,249,831	

支出の部　　(単価：円)

科目	決算額	予算額	差異	備考
収穫祭特別会計費	750,000	750,000	0	
ふじみの印刷費	278,250	290,000	11,750	
卒業祝賀会費	180,000	180,000	0	
卒業記念品費	206,580	222,000	15,420	
新入生歓迎会費	0	150,000	150,000	①
消耗品費	0	30,000	30,000	
特別講演会費	0	0	0	
備品	99,800	150,000	50,200	パソコンを購入したため
雑費	3,150	30,000	26,850	
予備費	5,000	5,036,132	5,031,132	②
合計（B）	1,522,780	6,838,132	5,315,352	
収支差額：(A)－(B)	3,065,521			

①H25 年度の新入生歓迎会は学科のオリエンテーションと同時期だったため開催されなかった
②学生の 1 名が畜友会費を 5,000 円多く納入したため返金した

平成 24 年度　収穫祭特別会計収支決算報告

平成 24 年 6 月 1 日～平成 25 年 5 月 31 日

Ⅱ. 収穫祭特別会計

収入の部　　(単価：円)

科目	決算額	予算額	差額	備考
一般会計からの繰入金	750,000	750,000	0	
口座維持費	16,250	0	△ 16,250	①
合計（C）	766,350	750,100	△ 16,250	

①畜産学科統一本部の OB、OG の方々のご厚意により T シャツ代を寄付していただいたため

支出の部　　(単価：円)

科目	決算額	予算額	差額	備考
統一本部	357,638	400,000	42,362	①
宣伝隊	48,470	50,000	1,530	②
特別企画	0	0	0	
装飾	42,908	50,000	7,092	③
家畜苑	95,103	100,000	4,897	④
体育祭	60,070	70,000	9,930	⑤
備品	27,800	25,000	△ 2,800	⑥
雑費	840	-	△ 840	⑦
口座維持費	100	100	0	
予備費	36,080	55,000	18,920	⑧
合計（D）	669,009	750,100	81,091	
収支差額：(A)－(B)	97,341	0	△ 97,341	

①団結式・慰労会の料理代、飲み物代、雑費
②電気、電気工具代
③ロープ・塗料代
④家畜運搬の為の交通費、衣装代
⑤畜産学科 T シャツ代
⑥ミシン、提灯代
⑦全ての振込手数料を科目の雑費として設けた
⑧体育祭で木材を購入したが、予算ででは足りなかった為、予算から支出した

上記の通り報告する。
平成 25 年 6 月 24 日

畜友会会長　半　澤　　惠 ㊞

監査報告書

畜友会会則第 9 章、29 条及び 30 条の規定に基づいて平成 25 年 6 月 11 日に平成 24 年度業務及び会計監査を実施しました。

事業報告、通帳、出納帳及び領収書を精査した結果、適切に遂行されたことを認める。

上記に相違ないことを認める。
平成 25 年 6 月 11 日

平成 24 年畜友会監査委員

原　ひろみ ㊞　　高橋幸水 ㊞
髙﨑淳史 ㊞　　棚原憲佑 ㊞

平成25年度　畜友会予算

（平成25年6月1日　～　平成26年5月31日）

Ⅰ．一般会計予算

収入の部　（単価：円）

科目		H25年度	H24年度	差異	備考
会費	新入生（H26年）	2,160,000(1)	2,160,000	0	
	編入生（H26年）	15,000(2)	15,000	0	
	過年度分	2,382,500(3)	1,770,000	612,500	
雑収入		0	0	0	
前年度繰越金		3,065,521	2,893,132	172,389	
合計		3,065,521	6,838,132	784,889	

(1) 新入生：10,000円×216名
(2) 編入生5,000円×3名
(3) 過年度分10,000円×235名＋5,000円＋7,500円×1名

支出の部　（単価：円）

科目	H25年度	H24年度	差異	備考
収穫祭特別会計費	703,000	750,000	△47,000	
ふじみの印刷費	290,000	290,000	0	
卒業祝賀会費	180,000	180,000	0	
卒業記念品費	230,000	222,000	8,000	4年生230名×1,000
新入生歓迎会費	150,000	150,000	0	
新入生親睦会費	50,000	0	50,000	※1
消耗品費	30,000	30,000	0	
特別講演会費	0	0	0	
備品	0	150,000	△150,000	
雑費	30,000	30,000	0	
予備費	5,960,021	5,036,132	923,889	
合計	7,623,021	6,838,132	784,889	

※1　H25年度の新入生歓迎会が開催されなかったため、代わりに新入生親睦会を行うため

特別会計予算

（平成25年6月1日～平成26年5月31日）

Ⅱ．収穫祭特別会計予算

畜友会援助費

収入の部　（単位：円）

科目	H25年度	H24年度	差額
一般会計からの繰入金	703,000	750,000	△47,000
口座維持費	100	100	0
合計(A)	703,100	750,100	△47,000

支出の部　（単位：円）

科目	H25年度	H24年度	差額
統一本部	400,000	400,000	0
宣伝隊	50,000	50,000	0
特別企画	0	0	0
装飾	50,000	50,000	0
家畜苑	100,000	100,000	0
体育祭	40,000	70,000	△30,000(1)
備品	0	25,000	△25,000(2)
口座維持費	100	100	0
雑費	3,000	-	3,000(3)
予備費	60,000	55,000	5,000
合計(B)	703,100	750,100	△47,000
収支差額(A)－(B)	0	0	0

(1) の減額は今年度から体育祭で使用するＴシャツは個人負担になるため
(2) の減額は今年度は備品を農友会費で購入するため
(3) の増額は今年から新しく雑費という科目を設けたため

農友会学科助成金

収入の部　（単位：円）

科目	農友会厚木支部助成金			備考
	H25年度予算額	H24年度決算額	差異	
畜産学科助成金	1,808,000	1,760,000	48,000	
預金利息	0	0	0	
合計	1,808,000	1,760,000	48,000	

支出の部　（単位：円）

	科目	農大厚木支部助成金			
		H25年度予算額	H24年度決算額	差異	備考
1	事務費	15,000	13,221	1,779	
2	記録費	11,000	10,290	710	
3	公用費	4,000	4,000	0	
4	交通費	201,000	135,310	65,690	①
5	神輿代	130,000	129,547	453	
6	パネル代	130,000	98,223	31,777	②
7	応援合戦・衣装代	200,000	189,699	10,301	
8	学内装飾費	465,000	441,337	23,663	③
9	収穫祭体験企画費	648,000	607,530	40,470	
	鋼管リース代	118,000	108,293	9,707	
	運搬代	220,000	220,000	0	
	装飾代	165,000	137,573	27,427	④
	活動運営費	145,000	141,664	3,336	
10	雑費	4,000	2,100	1,900	
	合計	1,808,000	1,631,257	176,743	

①の増額は部員増加に伴い団結式、慰労会の参加人数が増えたため
②の増額は補強用のたる木を増やしたため
③の増額は牛の模型と家畜小屋の柵の修復のため

平成25年度畜友会役員

平成25年6月1日～平成26年5月31日

役職（教員）	氏　　名	研　究　室
会　　長	半　澤　　恵	家畜生理学研究室
副　会　長	野　村　こ　う	家畜育種学研究室
	桑　山　岳　人	家畜繁殖学研究室

・執行委員

委員長	3年　式　地　優　貴	家畜飼養学研究室
副委員長	3年　長谷川　周　平	畜産マネジメント研究室
	2年　福王寺　嶺　平	未　　定
庶　　務	3年　楢　本　祥　大	家畜生理学研究室
	2年　中　里　健　人	未　　定
会　　計	3年　牛　丸　裕　喜	畜産マネジメント研究室
	2年　高　橋　みな美	未　　定
企画・渉外	3年　本　村　直　丸	畜産マネジメント研究室
	2年　小　山　美　紅	未　　定
編　　集	3年　浦　野　由　麻	家畜飼養学研究室
	2年　城　詰　完　奈	未　　定
監事（教員）	原　　ひろみ	家畜生理学研究室
	高　橋　幸　水	家畜育種学研究室
監事（学生）	3年　棚　原　憲　佑	家畜繁殖学研究室
	2年　増　田　康　司	未　　定

※学年は平成26年3月現在

第十四回厚木キャンパス収穫祭・第一二二回体育祭事業報告及び結果報告

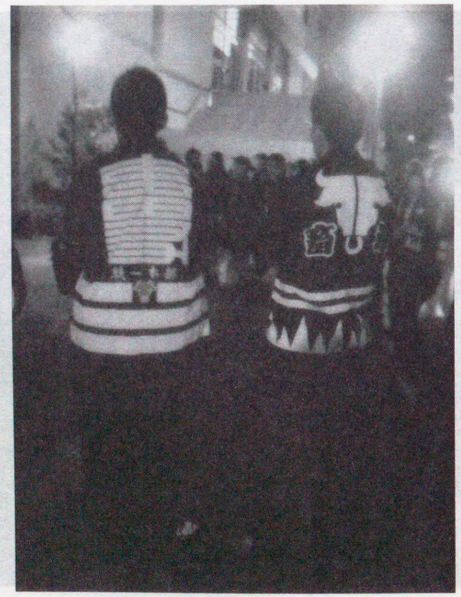
【事業報告】統一本部

今年度第14回収穫祭度畜産学科統一本部の活動は例年と同じく、収穫祭宣伝活動、研究棟アート、特別企画、家畜苑、櫓装飾、体育祭演舞を行いました。

統一本部（委員長、副委員長）の活動としては、先生方との連絡を取り、第14回厚木キャンパス収穫祭実行本部及び畜産学科統一本部、同じく厚木にある、農学科統一本部、バイオセラピー学科統一本部、また世田谷13学科、昨年度と同じくオホーツクキャンパスとも連携し、畜産学科統一本部をまとめ第14回厚木キャンパス収穫祭、第122回体育祭を成功させるため、夏休みから数ヶ月全力疾走してきました。

本年度は体育祭では昨年と同じく農大全学科で体育祭を競い合い、畜産学科統一本部としての活動としては新入生歓迎会を無くし、新たに新1年生親睦会を開催するなどのイベントを行い新入生を歓迎し、1年生から3年生総勢56名で力を合わせ収穫祭を成功させることが出来ました。

来年度は学生会館の取り壊し及び建設、学科長の交代など、例年では行われない行事が多いですが、どんな困難があろうと、誰一人欠けることなく、1年生、2年生それに来年度新1年生を含め、力を合わせ、今年だけではなく、畜産学科統一本部史上最高の収穫祭、体育祭を築けるように頑張りたいです。



特別企画

特別企画とは、収穫祭の盛り上がりの肝になるステージ企画の作成、並びに当日のステージ運営を任されている部門です。特に他の部門に比べ、他学科と共に行動することで強い連携を求められます。

今年度の畜産学科特別企画部門としての当日までの活動は、ステージ企画「NBC (Nodai Beauty Contest)」「ぶっつぁげ方言選手権」この二つの計画、小道具の作成、総務部や業者さんとの打ち合わせが主でした。「NBC」とは農大生のみなさんから有志で集まってもらったいわゆる美男美女コンテストで、毎年恒例で畜産学科が担当しており一日目の企画のトリを演出した大きな企画でもあります。「ぶっつぁげ方言選手権」とは今年度からの新企画であり、地方から学びに来ている生徒が多い農大の特色を生かした、方言コンテストです。みんなで意見を出し合い、試行錯誤することにより両企画共にしっかりと準備を進めることができました。当日は、各々割り振られた企画の裏方や司会を的確に務めることにより来場者、生徒のみなさんの笑顔を生み出せたことはもちろん、自分たちもやりがいと達成感を感じることができ、大成功だったと自負しております。これまでの収穫祭の記録や伝統を残しつつも、新しいことにも挑戦できたこれから先に繋がる活動内容でした。今年の成功も失敗も含めたこの経験を生かして、伝えて、来年度も必ず農大生として自分達を誇れるように活動していきたいと考えていますので期待して待っていてください。

宣伝隊

宣伝隊とは、厚木市内、市外のお祭りや周辺の各駅に行き、収穫祭のビラを配ったり、時には大根踊りなどの農大ならではのパフォーマンスを行いながら、収穫祭を宣伝する部門です。活動中は、東京農業大学厚木キャンパスのモチーフである大根と鮎の柄が入った白い浴衣に臙脂色の法被を羽織り、収穫祭の文字を背中に背負って宣伝活動を行っています。

今年はまず、八月に行われる鮎まつりのDance Legendに参加し、大根踊りを披露しました。また、ジャズナイトフェスティバル、もんじぇ祭りでのオリジナルうちわの配布や、本厚木周辺各駅での宣伝活動、本厚木周辺のお店にビラやポスターを置いて頂くことで、収穫祭を宣伝してきました。そしていよいよ学内も盛り上がってきた十月には、宣伝隊主催の大イベントである厚木パレードを開催しました。このパレードでは、厚木市の一番街で神輿を担ぎ農大生が厚木を盛り上げました。毎年大きな盛り上がりを見せていて、農大の収穫祭を大いにアピールできています。どの活動でも、沢山の人が「今年も収穫祭行くからね、頑張って。」と声をかけて下さり、収穫祭を毎年楽しみにしてくださっているのだと嬉しく思い、やりがいを実感できました。

収穫祭当日は、午前、午後と二日間で計四回、野菜の無料配布を行い、今年も大きな問題なく配りきれました。

来年度の抱負は、近年の来場者数の減少傾向を断ち切り、来場者数を増やすことです。具体的には、宣伝範囲を広げたり、新たな宣伝方法を取り入れるなどを検討中です。

神輿

神輿部門は、厚木一番街で催される「厚木パレード」における収穫祭の宣伝や本祭を盛り上げるために、夏休みとほぼ同時にスタートし約二か月の間神輿の製作をしました。

今年も去年と同様に、本祭における厚木キャンパス内での一般投票と、世田谷キャンパスでの審査が行われました。

今年の畜産の神輿は、去年と同様に担ぎ棒を紅白にし、見た目にもインパクトのある配色にしました。土台側面には前後に大きく「畜産」左右に「厚木キャンパス第一四回収穫祭」「東京農業大学第一一二回体育祭」の文字を入れ、和紙を張り、内側から光をあて文字を鮮やかに見せるようにしました。他にもミリ単位で設計し作りあげた桝組、畜産学科統一本部全員の名前が入った踊り場など様々な工夫を凝らしやっとの思いで完成させることができました。完成した神輿はひと目で畜産学科とわかる力強さを持ち、神輿らしい神輿という伝統を残しつつ、自分たちのオリジナリティを取り入れることができました。その甲斐あって、本祭の厚木一般投票では農学科と同率一位、世田谷では銀賞という輝かしい成績を収めることができました。世田谷キャンパスでの後夜祭では残念ながら神輿を担ぐことはできませんでしたが、金銀銅賞を厚木キャンパスで独占できたことは農学部として誇らしく思いました。

来年の神輿は伝統である「神輿らしい神輿」は残しつつ、自分たちなりのアレンジを加え、納得できる神輿を作り、厚木一般投票では一位、世田谷では金賞を狙います。

体育祭

体育祭は収穫祭後の行事として、世田谷キャンパスで行われます。世田谷、厚木キャンパスの学科だけではなく、オホーツクキャンパスの学科も含め合計で18学科対抗玉入れや大玉ころがし、綱引き、リレーなど多くの競技が行われ、どの学科もすごい盛り上がりをみせます。

その中でも体育祭の見所といえば、各学科対抗応援合戦です。畜産学科は夏休みから衣装つくり、ダンスの作成、練習をします。ダンスの練習は約一か月間毎日全体練習や個人練習をしました。今年度の畜産学科の体育祭のテーマは「凛」でした。畜友会全員で作り上げた「凛」は素晴らしい一つの作品ができたのではないかと思っています。でも今年の体育祭の応援合戦は10位という結果になり、本当に悔しい思いでいっぱいですが、当日は一人ひとり力をだしきり、練習よりも何倍も良い畜産学科らしい力強い踊りができました。

今年の体育祭は結果をまとめると応援合戦の部10位、競技の部7位、総合順位が6位という結果になりました。目標であった優勝にはとどきませんでしたが、今年度の畜産学科の収穫祭の集大成として最高の盛り上がりだったと思います。

ご協力していただいた先生方、OB・OGの皆様や畜産学科の方々、本当にありがとうございました。

来年度の畜産学科は今年の悔しさをばねにして、応援合戦はもちろん競技の部に関しても力を入れ、1位を狙っていこうと思います。

櫓

櫓装飾とは、高さ約４ｍ、横約10ｍの巨大なパネルに各学科でそれぞれのテーマに沿った絵を描いて競い合うものである。

本年度畜産学科の櫓は背景を白色としたことで黄金の波や緑の松などの背景の絵を目立たせることができ、白色の背景は他学科には無いため印象深い絵に仕上げることができた。

また、メインには例年とは違い鳥を使用し、畜産学科でなければ描くことのできないリアリティーのある正に本物の鳥を見ているかのような鳥を描くことができた。畜産の「畜」の字は、筆で書いたような荒々しさ、綺麗さが表現できた。作品を仕上げていく上で、一人ひとりが積極的に意見を出し合い、そしてそれぞれの担当の絵の部分を一つ一つ丁寧に、全力で取り掛かり最終的には全員が納得のいく櫓を完成させることができた。

櫓の活動は夏休みから始まり、作業場所は薄暗い体育館の下の駐輪場であった。夏は暑く冬は風が吹き抜け辛いときもあったが、組み立てや設置など様々な場面で手伝いに来てくれる一年生や他部門の人達の協力があり助けられた。そしてなにより明るいメンバーのおかげで話の絶えない楽しくて、非常に充実した日々を過ごすことができた。

結果は惜しくも4位であったが、私はこの活動で結果以上のかけがえのないものを得ることができた。私は今年櫓として活動してきたことを誇りに思う。

来年は今年得た経験と悔しさを力に、優勝を目指して迫力のある畜産らしい櫓を作っていきたい。

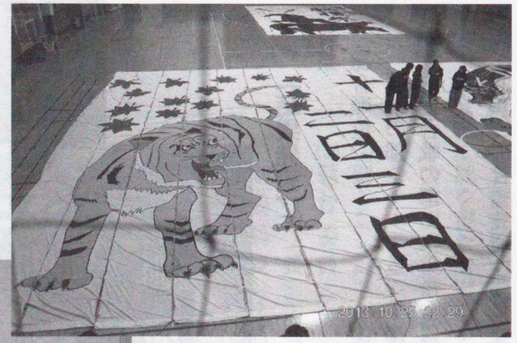
研究棟アート

僕らが担当する研究棟アートとは、壁一面に飾る大きな絵のことです。研究棟アートに、大きな絵を描き、収穫祭が間近であること皆様に知らせるのが僕ら装飾部門の役目です。

研究棟アートは、縦15メートル横1.2メートルの白い布を10枚繋ぎ合せてできています。今年も例年通り、食堂けやきから見える研究棟の壁の絵は二年生が担当し、湘北短期大学の通りから見える研究棟の方の壁の絵は三年生が担当しました。三年生は、龍と虎を描き、僕ら二年生は肉牛、馬、赤トンボを描きました。

八月から始まった作業は過酷なものばかりでした。夏休み中は、布を切り、布同士を繋げ合わせる耳をつくり、その耳を切った布にミシンで縫い付けるという作業を行い、それと同時に絵のデザインを考えていました。研究棟アートが形になった頃には、季節は秋になっており、寒い中布一枚一枚に色を付けていく作業を行っていました。研究棟に垂れ幕を飾ったときの達成感は、なににも変えられないほど僕の心に残っています。収穫祭当日も研究棟アートは破れず、収穫祭を見守ってくれました。

今年の作業が早く終わることができたのも、皆様の協力があったからだと思います。今年も多くの皆様に手作りの収穫祭をお伝えできたかなと思います。来年も楽しみにしていてください。



家畜苑

今年の家畜苑は3年生6人と2年生5人でスタートしました。家畜苑は例年男子が多く今年は男子が9人、女子が2人でした。女子が少ない中、それでもみんな仲が良く今年の収穫祭シーズンを乗り切ることができました。これもわからないことを一から教えてくれた先輩方のおかげです。収穫祭の準備はまず家畜動物を入れる小屋の単管を組む作業から始まり、2年生を中心に3年生にアドバイスをもらいながら家畜苑門、小屋のバックボード、顔パネル、案内看板などの製作に取り組みました。また今年はリヤマを借りることができなかったので新しい取り組みとして記念撮影のコーナーを作成しました。順調に作業が進むこともあればつい遊びすぎてしまうこと、時には仲間とぶつかり合うこともありましたが、全員が同じ目標を持ち収穫祭に向けて作業を行うことができました。家畜は畜産マネジメント研究室、家畜衛生学研究室、富士農場などのご協力で借りることができ、今年も無事に家畜苑を運営することができました。収穫祭当日は2・3年生、また、他の部門、1年生の協力のもと成功を収めることができたと私たち家畜苑のメンバーは実感しています。個性あふれる3年生と一緒に作業ができないのは寂しいですが、来年は今年よりも元気にやるときはやる、遊ぶときは遊ぶ、メリハリをつけて素晴らしい家畜苑を新しいメンバーで作りあげていきたいと思います。

そして何より3年生から教えられた「楽しく楽しく、そして楽しく楽しく」をモットーに頑張っていきたいです。

【結果発表】

体育祭

総合順位……6位
競技の部……7位
応援合戦の部……10位
櫓装飾……4位
神輿……銀賞

東京農業大学農学部畜産学科畜友会
〝畜友会〟会則

第一章　総則

第一条　本会は東京農業大学農学部畜産学科畜友会と称する。

第二条　本会は事務局を東京農業大学農学部畜産学科内に置く。

第三条　本会は会員相互の親睦を図り、併せて畜産学科の発展に寄与することを目的とする。

第二章　業務

第四条　本会は第三条の目的達成のために次の事業を行う。

(1)会員相互の親睦
(2)講習会、研修会及び研究会発表の開催
(3)機関紙「ふじみの」の発刊
(4)大学行事（収穫祭等）への参加
(5)その他第三条に付帯する業務

第三章　会員及び役員

第五条　本会の会員は次の通りとする。

(1)正会員　畜産学科の学生
(2)特別会員　畜産学科教職員ならびに大学院生
(3)名誉会員　役員会の推薦を受け、総会の承認を得た者。

第六条　本会は次の役員を置く。

(1)会　　長　1名
(2)副　会　長　2名
(3)執行委員
　委　員　長　1名
　副委員長　2名
　庶　務　2名
　会　計　2名
　企画・渉外　2名
　編　集　2名
　監　事　4名

第七条　(1)会長は会を代表し、会務を総理する。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはこれを代理とする。また1名は総務を他の1名は会計を分担する。
(2)委員長は会長の指示を受け、執行委員会を統括する。
副委員長は委員長を補佐し、委員長不在の時はその代理をする。各委員長はそれぞれの会務を分担執行する。

第八条　(1)本会には連絡委員を置く。
(2)連絡委員は1、2年次からそれぞれ4名、各研究室から1名選出する。連絡委員は各学年および各研究室の意見を掌握し、連絡

委員会でその意見を反映するとともに執行委員会の決定事項を会員に伝達する。

第九条　役員および連絡委員の選出および任期

(1)会長は畜産学科長がこの任にあたる。副会長および監事は、会長が畜産学科教職員の中から推薦し、総会において決定する。

(2)執行委員は、執行委員会の推薦に基づき総会において決定する。但し、委員長は3年次生、各執行委員の2名の内1名は3年次生、ほかの1名を2年次生より選出するものとする。尚、監事4名の内の2名は畜産学科教職員がその任にあたる。また、監事はほかの役員を兼任することはできず、その任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

(3)執行委員に欠員を生じた場合は、執行委員会に諮り補充することができる。

(4)連絡委員は、各学年（1、2年次）および各研究室（3、4年次）で協議のうえ選出する。また、任期は原則として1年とし、再任を妨げない。

第四章　総会

第十条　(1)総会は定期総会とする。

(2)総会は正会員および特別会員を持って構成され、本会の最高意思決定機関とする。

(3)定期総会は原則として年一回、六月に会長が招集し、開催する。

(4)臨時総会は会長が必要と認めた場合ならびに正会員および特別会員総数の4分の1以上の同意を得て開催目および招集理由を記載し、会長に提出する時招集開催することができる。

第十一条　総会開催は七日以前に公示しなければならない。

第十二条　(1)総会は正会員および特別会員の4分の1以上の出席により成立する。

(2)委任状は所定の用紙に署名捺印のうえ議長に一任する。委任状は総会の定足数に含まれるが、正会員および特別会員の5分の1を上限とする。

(3)委任状の検査は執行委員が行う。

第十三条　定期総会は次の事項を決議する。

1．前年度の事業報告および収支決算報告

2．次年度の役員

3．次年度の事業計画および収支予算

4．会則の改正

その他

第十四条　総会における議長は総会においてその都度互選する。尚、必要に応じて議長は副議長を指名することができる。

第十五条　議長は書記2名と議事録署名人2名を選出する。尚、議事録署名人の内1名は畜産学科教職員とする。

第十六条　総会の議決は出席者の過半数によって議決され、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第十七条　総会出席者により執行委員の不信任を可決することができる。但し、この場合の出席者には委任状は含まない。

第五章　執行委員会および連絡委員会

第十八条　(1)第六条(3)の執行委員会は本会の最高執行機関たる執行委員会を構成する。

(2)会長および副会長は必要に応じて執行委員会に出席することが出来る。

第十九条　執行委員会は原則として月一回委員長が招集する。執行委員会は執行委員の3分の2以上により成立する。執行委員会の議長は委員長が勤め、出席者の過半数より可決し、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第二十条　執行委員会は総会の議決に基づき、本会の目的遂行に関する一切の会務を執行処理する。

第二十一条　執行委員会で議決された事項について、委員長は会長および副会長に文章で必ず報告する。

第二十二条　連絡委員会は委員長が総会前に必ず招集開催する。また、委員長が必要を認めた場合に開催することができる。

(1)連絡委員会には執行委員および連絡委員が出席する。議長は委員長が務める。

(2)連絡委員会は次の事項を処理する。

1．執行委員会で決定した事項の伝達。

2．一、二年次および各研究室からの意見の聴集および意見交換。

(3)連絡委員会には必要に応じて会長、副会長も出席することが出来る。

第二十三条　本会の事業年度および会計年度は6月1日に始まり、翌年の5月末日までとする。

第六章　会計

第二十四条　本会の運営は会費および寄付金ならびにその他の収入を以ってこれにあてる。但し、第四条の目的を達成のため臨時徴収する場合もある。

第二十五条　(1)会費は年間二、五〇〇円とし、入学時に一括して一〇、〇〇〇円を納入する。編入・転学科学生は学年に応じた金額を一括納入する。但し、一度納入した会費は返金しない。しかし、入学取り消しの場合はその限りではない。

(2)会費は会長および委員長連名で毎年6月に入学対象者に対して請求するものとする。

第二十六条　本会の会計は、所定の形式に従って処理し、

決算はすべて監事の監査を経なければならない。

第七章　機関紙「ふじみの」編集発行

第二十七条　(1)第四条(3)の目的達成の為に編集委員会を設ける。

(2)編集委員会の委員は執行委員および正委員の中から若干名選出する。

(3)編集委員会の責任者は編集委員のうち1名が担当する。

(4)編集委員会は機関紙「ふじみの」の編集発行を責任もって執行する。

第八章　大学行事への参加

第二十八条　(1)第四条(4)の目的達成の為に必要に応じて委員会を設ける。

(2)設けた委員会は本会の目的達成の為に執行委員会の意思を受け運営する。尚、内規は別に定める。

(3)委員会の責任者は執行委員の内1名が必ず当たる。構成員については、正会員の中から必要に応じた人数を選出する。

第九章　監査

第二十九条　監事は本会が目的達成の為、円滑に業務を執行しているか否かを監査する。

第三十条　監事は前条目的の為業務監査および会計監査を行い、その結果を総会において報告する。尚、必要と認めた場合は臨時監査することができる。

第十章　付則

第三十一条　本規定の最終解釈は役員会で行う。

第三十二条　本会則は、昭和35年6月29日に制定された東京農業大学畜産学科〝畜友会〟規約を平成元年7月7日に一部改正し、それを元に平成10年2月20日に新たに東京農業大学農学部畜産学科〝畜友会〟会則を制定し施行する。

本会則は、前会則の一部改正し、平成23年6月23日より）これを施行する。

畜友会収穫祭内規

第一章　目的

第一条　本内規は東京農業大学農学部畜産学科畜友会会則（以後畜友会会則と称す）第28条によりこれを定める。

第二条　収穫祭は東京農業大学農友会厚木支部収穫祭規定第1条及び第9条に基づく収穫祭に参加する。

第二章　組織および役員

第三条　収穫祭を円滑に運営するため畜産学科収穫祭実行委員会（以後実行委員会と称す）として次の組織を置く（以後6本部と称す）。

1．統一本部
2．宣伝隊実行本部
3．特別企画実行本部
4．学内装飾実行本部
5．家畜苑実行本部
6．体育祭実行本部

第四条　実行委員会に次の役員を置き、会務を処理する。

統一本部顧問　若干名
統一本部委員長　1名
統一本部副委員長　1名
統一本部会計　1名
各実行本部顧問　若干名
各実行本部委員長　各1名
各実行本部会計　各1名

第五条　(1)統一本部顧問および各実行本部顧問は畜産学科教職員より畜友会会長がこれを委嘱する。

(2)統一本部委員長は畜友会執行委員、統一本部副委員長、統一本部会計、各実行本部委員長および各実行本部会計は統一本部委員長が畜友会執行委員会の承認を得た後、畜友会会長の了承を得てから委嘱する。

(3)統一本部および各実行本部の担当者は正会員の中から募集し、統一本部委員長がこれを委嘱する。

第六条　(1)統一本部顧問および各実行本部顧問は統一本部および各実行本部の指導にあたる。

(2)統一本部委員長は各実行本部を統括する。統一本部副委員長は統一本部委員長を補佐すると共に統一本部担当者と協力して各本部の円滑な運営活動を助ける。

(3)各実行本部委員長は各実行本部の運営を担当する。

第七条　実行委員会の機関として6本部会議および各実行本部会議を置く。

(1)6本部会議は、各実行本部顧問、統一本部委員長、統一本部副委員長および統一本部

会計ならびに各実行本部委員長、で構成し、畜産学科収穫祭全体の重要事項を審議する。6本部会議の議長は統一本部委員長がこれを務める。

(2)各実行本部会議は統一本部委員長、統一本部副委員長、各実行本部委員長および各実行本部担当者で構成し、各実行本部の運営活動を審議する。各実行本部会議の議長は各実行本部委員長がこれを務める。

第三章　会計

第八条　収穫祭の会計は特別会計として畜友会収穫祭援助費および農友会厚木支部収穫祭助成金ならびにその他の収入をもってこれにあてる。

第九条　予算は畜友会執行委員会で編成し、畜友会定期総会で承認を得る。

第十条　会計処理は別に定める。「会計処理取扱細則」によって処理する。

第十一条　決算書は統一本部がこれを作成し、畜友会執行委員会に諮り、畜友会監査を受けた後、畜友会定期総会で承認を得る。

第四章　付則

第十二条　本内規の改正は6本部会議で原案を作成し、畜友会執行委員会で承認を得る。

第十三条　本内規は平成15年6月1日よりこれを実施する。

本内規は前内規を一部改正し，平成23年6月23日よりこれを施行する。

各部門委員長より

なめたらいかんぜよ。

統一本部委員長
3年　式地　優貴

今あっという間に三年になり、自分が畜産学科統一委員長として、引っ張る代になりました。夏休みから準備をしていくなかで、歴代の先輩が言っていた意味がじわじわと分かってきた。ということでわしの時代やなあと思い噛みしめながら過ごしてやろうと思ったっす。しかし、人の上に立って何かをするということはこんなにも大変なんだなと感じ、今までの自分にも反省した。正直、終わった今だから言えるが、不安しかなかった。なぜかと言うと、みんなが暴れるから。元気すぎるから。ただしかーし！こいつらとともにわしも暴れてやろうと決意もしました。

最近畜産学科は成績がふるわず年々体育祭の順位が低下してきていて、絶対今年は強くてかっこいい畜産学科を見せつけてやろうと思った。三年生の委員長のみんなも同じように思っていたのではないでしょうか。終夜が始まってから、寝不足や作業が思いどおりに進まないなどで、個人個人に余裕もなくなってきて、時には部門でぶつかり、時には学年でぶつかり、部門内でもぶつかりということもあったと思います。そういう中での、よく毎晩炊き出しを食べたりしたことがいい方向につながったと思います。

だけどもだけども最後はしっかりまとまる畜産学科統一本部。みんなで特別企画楽しんで、空き時間は家畜苑手伝って、野菜も配って、さらに体育祭。今年は勝負に出た今までにない素晴らしい櫓のもとに集い、競技、演舞で他学科に畜産の存在を知らしめる。わしはこれが一番の目的です。気分がとてもよいのです。あー最後の最後までほんまに優勝やないかと思ってました。

新一年生は入ってからのお楽しみ。初々しい一年生、いろいろと騒がしいけど楽しい二年生、それよりも騒がしいけど頼りになる三年生。たいしたことは何もやってないですが、みんなの代で統一委員長が出来てよかったし、ついてきてくれてありがとう。

そしてそして、来年が楽しみすぎます。頼んだぞ福王寺！

自分の中には今でも、結果には残りませんでしたが、みんなそれぞれ分かっているとおもいます。真の勝者だということを。

最後になりましたが、半澤学科長をはじめとする諸先生方におかれましては今年一年多大なご協力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

みんなに支えられて

特別企画委員長
3年　池内　元希

今年のシーズンも昨年同様楽しく作業することができました。これも畜産学科特別企画のメンバーを含め、総務部の特別企画の方々、他学科の特別企画の方々に支えられてのことだと思っています。心から感謝申しあげます。今年の企画としましては、新しい企画である「ぶっつあげ方言選手権」と例年どおり「NBC」を担当しました。どちらの企画も出場者が見つからず、出だしから苦労の連続でした。今回の収穫祭のステージ企画はあまり良かったとは思えません。自分たちだけでは成り立ってなかったと思います。周りのみんなに支えられてなんとか成功という形になりました。出場者との連絡がうまくできずシーズン終盤にもトラブルが起こり総務部と他学科の方々に迷惑をかけてばかりでした。特に総務部の松岡にはとてもお世話になりました。忙しいのに一緒に考えてくれたり、出場者が集まらない時にいろいろと手回しをしてくれてとても助かりました。後輩の二人に先輩として見せることができたのはほんの一部だけだと思います。しかし一緒にいるのが楽しいとか、面白いとか、お世辞かもしれませんが素直にうれしかったです。こうやって思い出してみると書ききれないのでこれくらいにしておきたいと思います。

今年の畜産学科特別企画は男5人でスタートしました。本当は自分自身女性が一人欲しかったのですが、自分の思いとは全く違う男くさい集団となってしまいました。しかしふたを開けてみれば、とても面白く、楽しい日々を送ることができました。男だけの集団ということもあり、本能のままに行動する奴もいれば、ふざけることしか考えない奴、とても個性が豊かでまとめるのが大変でした。しかしみんないろいろと手伝ってくれてほんとに助かりました。ではここら辺で畜産学科特別企画のみんなに一言ずつ書かしてもらいます。まずは3年生から書きたいと思います。

裕太へ、とりあえず毎日笑いをありがとう。ムードメーカー的な存在で、裕太がいるだけでみんなが笑顔になれたと思います。司会もう少し頑張ってくれたらうれしかったです。

近澤へ、お前は存在感が薄すぎてどこに居るかわからない時もあったけど、何気に頼りにしていました。台本とか音源とか手伝ってくれてありがとう。

次に2年生の大矢と岸へ、まともな先輩ではなかったと思いますがついてきてくれてありがとう。来年は上の立場なので大変だと思いますが二人なら大丈夫だと思うので頑張ってください。お互いが支えあって若い人からお年寄りの方まで楽しめるステージ企画を作ってください。とても期待しています。畜産学科特別企画のみんなありがとうございました。

色がついた2年間

宣伝隊隊長
3年　當間　恵理

私が畜友会に入った理由は、友達に誘われたからという軽いきっかけでした。その中で宣伝隊を選んだのも名前のニュアンスで決めました。しかし、いざ入ってみると私の想像とは違い4月からの毎週の会議に始まり、青山ほとりの練習、ひたすらビラに種をつけるという地味な作業…。しかもバイト禁止令は出されるし、自分の趣味の時間が無くなるし正直辞めたいなと思う事は多々ありました。でも、鮎祭りや厚木パレードなどの行事を終えるにつれて達成感ややりがいを感じて、やってよかったと思えました。

そして去年の交代式の日、野迫先輩から法被をかけられた時は、驚き、嬉しさ、一番大きかったのは不安という気持ちでした。私なんかに隊長が務まるのかと。ですが、先輩が選んだのは私だと、後悔だけはしない、させない一年間にしようという思いでやってきました。まぁ実際は、他学科と上手くいかなかったり、迷惑かけたりで隊長としてやれたかと聞かれると何も言えないですけど(笑)それでも体育祭の後、先輩に「隊長を當間にして良かった」と言ってもらえた時は本当に嬉しくて頑張って良かったと思えました。

宣伝隊はどの部門よりも先に作業を始めて最後に終わるという一番長く作業をしている部門だと思います。しかも作業は地味なことばかりで完成という言葉もなく、しまいには「宣伝隊って何やってるの?」と言われる始末。他の部門から「宣伝隊は縁の下の力持ちだよね」と言われて、その通りだなと思いました。色んな人と関わり、色んな事をする。そんな影で収穫祭を盛り上げようとしている宣伝隊のみんなを尊敬するし、その一員になれて私は本当に嬉しかったです。良くも悪くも凄く濃い2年間で充実した日々を送れました。この日々は何年経っても色褪せる事のない思い出です。畜友、宣伝隊のみんなありがとう!!!!!!!!

野迫さん、薮さん!写真や差し入れありがとうございました。本当に尊敬できる良いパパとママです!!

由麻、歯孕尾!2年間ありがとう。うちが隊長になってからも色々サポートしてくれてありがとね。2人がいてくれたからうちも頑張れたんだよ。うちは畜宣伝この3人が最強メンバーだと思ってマス(笑)

尾内、完奈、増田!頼りないうちについてきてくれてありがとう。君達は本当元気よくて、一緒にやってきて楽しかったし、だから引退が寂しいと思えた。君達も楽しいと思えたならうちは満足です。来年は不安な事もあるだろうけど君達なら出来る!頑張れ!

最後に、参与の先生方を始めとする諸先生方、並びに収穫祭実行本部の皆様、研究室の皆様、この第十四回収穫祭を無事に終えられたことをこの場を借りて、厚く御礼申し上げます。

畜産神輿製作所

神輿隊長
3年　中村　大輔

「夏休みに入った数日後の八月六日、体育館下の一室で私たち神輿部門のシーズンが幕を開けた。どこの部門よりも早く活動が始まり、一番活動期間の長い部門でもある。

昨年の隊長から誘われて希望した神輿部門、畜友会に入ったのが二年生からだった私は、期待と不安が入り混じりながらも、シーズンが終わってみれば、神輿は金賞、そしていつの間にか私は隊長になっていた。物を作るということに関して、他人に絶対負けたくないという思いがあった、絶対に勝ちに行く。そのぐらいの意気込みで製作に臨んだ。畜産学科の神輿は毎年のように良い成績を残しており、なおかつ昨年金賞を味わった私はプレッシャーを感じ、不安でたまらなかったが、それと同じくらい無駄に自信が湧いていた。笑　逆境に立つと燃える…と似たような感じで。笑　とりあえず今年のテーマは、畜産神輿の伝統でもある「神輿らしい神輿」はもちろんのこと自分たちのオリジナリティも盛り込んだ、誰が見てもカッコいいと思う「THE神輿」をコンセプトに製作を進めた。

今年から審査規格が変わり、例年よりも縦・横、共に小さくなり、担ぎ棒の大きさは、2500ミリ×1500ミリにし、なるべく神輿を大きく見せたかったので規格いっぱいにした。そして、色はというと昨年と同様紅白にした。これは、見た目のインパクトという点では、かなり目を引くものがあったので採用した。

次に土台となる部分の製作を行った。ここには三つ巴を真ん中に、それを挟むように畜産の文字を入れ切り抜いた。そして今年の神輿の特徴でもある、真鍮版を使った飾り金具、これを土台の四つ角に取り付けた。金属を加工するのは難しく、失敗したら修正が効かないので大変だった。そして一番時間のかかった桝組を作る工程では、設計図を何度も書き直したり、作り直したりと相当な時間を費やしたのも相まって完成した時の様子は圧巻だった。その他の部分にもこだわり、畜産学科を前面に押し出しつつ目立つように金を多く使ったのも特徴である。

中々全員揃うことが出来ず、作業が進まないこともあったりしたが、揃った時はすごい団結力を出して一気に作り上げたりと、色々と短期集中ではあったものの、納得のいくものができ、皆で協力して一つのものを作り上げる大変さを身に染みて実感した。

こうして出来上がった神輿は、頭の中で思い描いていた通りの神輿になった。体育祭の神輿投票では銀賞で悔しい思いをしたが、統一の皆や先輩方に、神輿かっこよかったよ！と言ってもらえたのがとても嬉しく、今までのがんばりが報われたと思う瞬間だった…。

そして、なおと、ならしょ、まろ、ちーやん、二年生、こんな行き当たりばったりのノープラン野郎についてきてくれて本当にありがとう。新隊長あやべ！来年はしっかり計画立てていっぱいいっぱいにならないように。笑　うと、まみたす！あやべのサポートよろしくね！

最後に、畜産学科統一本部　畜友会最高！

畜友会に入って

体育祭委員長
3年　東原　正弥

自分がここまで体育祭の委員長をやり遂げることができるとは考えていませんでした。大学に入学してすぐの頃自分は正直暗くて、人と会話するのが苦手で内気であったために大学はそれほど楽しいものではありませんでした。この畜友会に入ったのも自分から行けたわけではなく、同期の友達からの誘いを受けておそるおそる入ったことがはじまりでした。そして体育祭部門に入り、応援合戦の練習を中心として先輩の指示通りに、毎日毎日夜遅くまでキツイながらもやっていました。このシーズン期間中はこれまでの生活が一変して、たいへんですがこの日々が自分にとって今までにない楽しさと毎日が新鮮であったために、キツサも忘れてしまうほど体育祭や収穫祭に力を入れていました。そんな中で自分が少しずつ明るく、そして色々な人と話ができるようになってきました。人に応援合戦のダンスを教えるのはとても難しく苦労しました。手探りの状態の中ですべてを出し切りました。一生懸命に教えてダンスができるようになった時は、とてもうれしかったです。そんな経験を生かした上で自分が体育祭の委員長として法被をもらった時は、うれしさもありますがすごく重みのあるものだと感じ、それとともに大きな不安でいっぱいでした。伝統のある畜産であることは一年生の頃からよく耳にしていただけに、そんな重役を自分が勤めても良いのだろうかと考えることがしょっちゅうありました。やはり応援合戦の案を決めるのに時間がかかったり、同期の中でも連携が悪くとても苦労しました。自分がこうして苦労したこともあげていますが、実際は楽しいことの方がはるかに多くて、みんなと過ごした時間が今となっては大変貴重なものでした。本当に本番までの時間はあっという間でした。

今回の第122回体育祭では総合6位、競技7位、櫓装飾4位、応援合戦10位という結果を取ることができました。自分たちが一番力を入れてやってきた応援合戦で良い結果を残せずとても悔しい思いをしました。しかし、全力でやったことにまちがいはないので悔いはありません。例え結果はついてこなくてもみんなの努力や支えがあったから、このような結果が出たのだと思います。時には笑ったり、時には怒ったりしながらも練習で一生懸命やってくれたみんなのことを考えて思い出すと、僕は良い経験をさせてもらったと思います。

自分が大学生活でこれほどの感動を味わうことができるとは考えていませんでした。畜友会に入り本当に大学生活が変わりました。最高の思い出を与えてくれたみんなに感謝しています。

たくさんのありがとう

櫓装飾委員長
3年　長谷川　怜加

『来年は鶏を描こう。』と話し合った去年の十一月から、あっという間に月日は流れた。今年の四月から構図を考える日々が始まり、授業後にメンバーと話し合いをしたのも、今はいい思い出の一つとなった。今年のメンバーは、一人一人が優勝することに対して強い意志を持っていて、私は『このメンバーなら良い作品が作れる』と確信していた。

絵を描き始めてからは時間が経つのが恐ろしく早く、そんな日々の中で少しずつ完成に近づいていく櫓を見ることが一日の楽しみとなった。しかし、夜になれば作業場所は冷たい風が吹き、台風の影響で作業が進まない日もあり、決して完成までの道のりは楽なものではなかった。それでも、手の空いた他部門のメンバーが手伝いに来て応援の言葉をかけてくれたことで、色々な困難も乗り越えることができた。自分が想像していたよりもずっと素晴らしい櫓を完成させることができたのは、メンバーと櫓に携わってくれたみんなのおかげだと思う。本当にありがとう。

四位という結果を知った時は悔しさで涙が止まらなかったけれど、全員で同じ感情を抱くことができ、泣けるほど真剣に作業に取り組んだこの日々は私にとって一生の宝物となった。

それではここで櫓のみんなに。来年度委員長の茂田井、これから悩む事や辛い事がたくさんあると思う。でもそんな時は遠慮なく連絡してね。いつでも話聞くし応援しているからね。ゆいちゃん、大量のグラデーションやらせてごめんね。すごく上手で驚いたよ！二人共お疲れ様。頼りない委員長について来てくれて本当にありがとう。来年の櫓がすごく楽しみです。そして金貼り名人の福王寺、深夜まで手伝ってくれてありがとう。誰よりも金を貼ってくれた福王寺は櫓のメンバーだと私は思っています。本当にありがとう。

そして三年生。しっかり者のほっしー！細かい注文をしたり、何度もやり直しさせてしまったこともあったけど、嫌な顔せずに取り組んでくれてありがとう。いわんこふ、私が行き詰まった時にいつも適切なアドバイスをしてくれて本当に助かった！いわんこふが塗った羽は最高だったよ。櫓一のお調子者山根。作業中弱気になった私を、持ち前の明るさで救ってくれてありがとう。山根が言ってくれた『大丈夫だよ！』で何度助けられたかな。とにかく、みんなで櫓を作ることができて本当に幸せだった。自分の描いた絵に真剣に取り組んでくれて、最高の作品になって、感謝の気持ちでいっぱい。もうこんなこと死ぬまでないって本当に思う。だからみんなが大好き！やっぱり畜産の櫓が一番良かったよね、絶対。（笑）数年後に、お酒飲みながらまた櫓のことをいっぱい話そう！

こんなに素晴らしい思い出が作れて、最高の仲間と出会える場を提供してくれた畜友会統一本部、本当にありがとう！

Shall We ミシン？

装飾委員長
3年　小泉　貴大

ミシンの扱い方なんて全く皆無だった小5の時から約10年経った大学2年の夏、僕はミシンを無我夢中で動かしていた。『ガタガタガタ』これが俺たちの熱いシーズンが開幕したという合図だった。

大学2年の夏、装飾は色塗ってワイワイ楽しくやっていればいいのだろうなと思っていました。しかし考えが甘すぎました。暑い中での布切り、そして毎日毎日ミシン、ミシン、ミシーーーン！想像していた色塗りなんて遠い夢。同じ歳のやつよりミシンを上手く使える自信があるし、そこらへんのお姉ちゃんよりも女子力が高いと思っています。肩に何かが取りついているのかと錯覚したこともあります。それでも一気に垂れ幕に下書きをして、徐々に色も塗られ、完成してみると、自分たちはこんなに凄いものを作っていたのか、こんなに大勢の方々に見てもらえるのか！と達成感でいっぱいになりました。そして、装飾のやりがいを知りました。

3年になり、ついていく側から引っ張る側へ。前委員長の、ゆうさんのすごさを改めて知りました。僕は人を引っ張ることが得意ではなかったのですが、みんなでワイワイ楽しく騒ぎ、やるときはしっかり作業ができる。というメリハリのある作業環境を目指してやってきました。

去年の垂れ幕は、『鳳凰』がテーマでとても色鮮やかで綺麗でした。今年は『龍虎』をテーマにしました。去年より色鮮やかなものではなかったのですが、その代わりにインパクトと雄大さを全面に出せたと思います。

僕は今年誇らしい事がありました。それは、垂れ幕が破れることなく収穫祭の2日間飾ることができたことです。去年は僕らが2年の時に飾った垂れ幕が裂けて残念な気持ちでした。それだけは嫌だったので色塗りの時に使うペンキの量を考えて色を塗りました。

今年は台風が来たりして雨が降る日々が続いたり、僕のミスがけっこうあって、垂れ幕に使う布の長さが足りなくて買い直ししたりしてほんと申し訳ない。のむ！今までありがとう。ほんわかマイペースな感じやったけど、俺がおらん時に2年をまとめて作業をしてくれてほんとうに嬉しかった。たかみな！いつもまじめに頑張っていて素晴らしい子だと思いました。もうちょっと力を抜いて。みくちゃん！俺らと同じ歳で色々と戸惑ったかもしれないけどよく気を使ってくれてありがとう。作業中にいっぱいあほなことしてくれて空気をよく和ましてくれて助かった。きゃさりん！来年の装飾、任せたで。俺らの良かった所やそうじゃなかった所を考えてやって下さい。3人で力を合わせて頑張ってくれー。

頼りない委員長やったけど、この個性が強いメンバーと作業ができて僕はとても良かったと思います。今の2年が主体で来年はもっとすごいものを作ってくれる事に期待しています。ご指導してくれた先生方、色々とお手伝いしてくれた総務部や業者さんありがとうございました。

家畜苑

家畜苑苑長
3年　長谷川　周平

今年の家畜苑は3年生6名、2年生5名の計11名でスタートしました。昨年より人数も多く畜友会の中でも1番人数の多い部門でした。みんな明るく元気がありやるときは仕事もバンバン進みやりやすかったです。反面、まとめるのに苦労する場面もありました。全体を通して言えば、収穫祭当日も大成功に終われたのでよかったと思います。昨年度の家畜苑の委員長から委員長法被を肩にかけられた時、不安もありましたが無事に終われて今はホッとしています。

今年は家畜を入れる小屋の単管を組む作業から始まり、小屋のバックボード（絵）の作成、顔パネルや案内看板、家畜苑門などを作成しました。それと去年にはなかった豚の模型を作成し、大変お客さんに好評だったと思います。それぞれの担当に分かれてうまく作業が出来ました。

家畜は畜産マネジメント研究室、家畜衛生学研究室、富士農場などの協力で今年も家畜苑を運営することが出来ました。バター作り体験では毎年好評で多くの方々が希望されていましたが、今までは家畜苑から研究棟まで移動していて大変でした。そこで顧問の村田先生、衛生担当だった多田先生に協力していただき、体育館下の卓球場を会場にすることが出来ました。来年度に向けてもいい流れをひとつ、形に残せたと思っています。

家畜に関しては毎年リャマや牛などが家畜苑に富士農場から来ていましたが、今年からリャマが居ないということで色々と試行錯誤した結果富士農場から牧草、フォーク、ミルカー、乳管を借りました。そしてバックボードにタワーサイロと牛舎を描いて牧草などを置き、酪農家っぽい格好をしてもらい写真撮影が出来る場所を設けました。これが思ったよりウケも良く小さい子供から年配の方まで写真を撮っている姿を見ることができました。

畜産学科統一本部、本部開きの時、去年とは違う家畜苑にしたいですと私は話した記憶がありますが、大きくは変われなかったかもしれませんが、一歩前に進めた気持ちです。これは今年度の家畜苑11人の努力の成果だと思います。

昨年より今年、今年より来年と少しずつでも家畜苑が良くなっていくことを切に願うと共に来年度家畜苑の苑長を中心とする家畜苑メンバーの活躍を期待しています。

編集後記

今年は記念すべき第50号目となる『ふじみの』を、発刊することができました。

第14回収穫祭は2日間、両日共に天候に恵まれ、3万2千人を超えるたくさんの方々にご来場いただきました。野菜の無料配布や家畜苑も大盛況に終わり、他にはない農大ならではの地域から親しまれる行事になってきたのではないかと感じました。

第122回体育祭は昨年に引き続きオホーツクキャンパスの学生も参戦し、総勢16学科で行う最高に盛り上がった体育祭でした。

この『ふじみの第50号』が、今後の畜産学科の更なる発展を担うものになれば幸いです。

最後になりましたが、この一冊を発刊するにあたり、お忙しい中ご寄稿くださった先生方、学生の皆さん、ならびに会員の方々に深く御礼申し上げます。

編集委員長　3年　浦野　由麻

平成26年3月20日　発行
“ふじみの”第50号
ふじみの執行委員　浦野　由麻
城詰　完奈

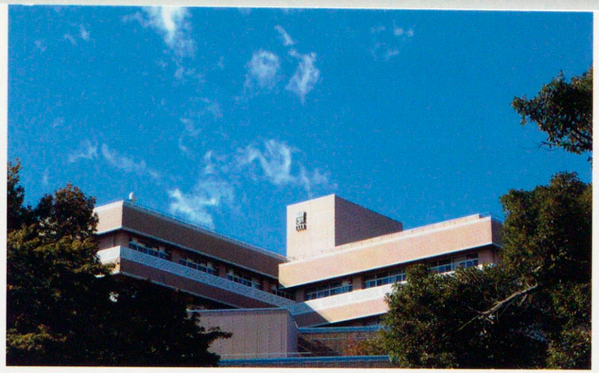
発行者　神奈川県厚木市船子1737
東京農業大学農学部畜産学科畜友会
電話 046(270)6220（総務課）

印刷所　東京都荒川区西尾久7-12-16
創文印刷工業株式会社
電話03（3893）0111

東京農業大学

東京農業大学畜産学科

CHIKUSAN
東京農業大学畜産学科



TOKYO NOUGYO DAIGAKU CHIKUSAN-GAKKA